

敦煌本『壇經』について

—いくつかの問題点と本文校訂—

孟 東 燮

一節 敦煌本『壇經』の本文校定について

敦煌本『壇經』の公刊から65年の間に、大勢の研究者たちによって、いろいろな側面からさまざまなアプローチが行なわれてきたのである。その主な研究成果は、書誌学的なものや文献学的ものとのこの本の成立の問題や内容分析に関するものである。しかし、主な研究は断片的である。研究の年月の長さ
と研究者の幅広さにもかかわらず、学界は未だにこの本に対して統一された
共通の認識に至っていない。いったい何が問題なのか。不思議でかなわない。
何か複雑な先入観が混在しているに違いない。その先入観の一つは、柳田聖
山先生が指摘しているように、“六祖その人に『六祖壇經』、もしくは語録が
あったという、先入観より生まれることと、宋代以後の禅文献から形成され
ている惠能の六祖としてのイメージが、この文献に投影されることもあるだ
ろう。もう一つの「悪本」という先入観は、松本文三郎の「六祖壇經の書誌
学的研⁽¹⁾」以来、研究者たちのこのテキストに対する不信感から起因するのだ
ろう。ゆえに研究者たちが何回も反復校訂しても満足できるテキストにはな
らなかったのである。

最近、伊吹敦氏は、先学の研究成果の蓄積を批判的に受容しつつ、敦煌本、
北京本、旅博本の出現による時宜を得て、「敦煌本『壇經』の形成—惠能の原
思想と神会派の展開—」と題する長編の総合的研究を発表された。ここで伊
吹敦氏による今までの研究に対する問題提起と新しい方法の提案を吟味しな
がら、同氏の方法論に基づく研究成果を検討することによって、本論におけ
る問題の提起を明らかにしうと思うし、研究の範囲と方法もそこから導か
れると思うのである。

2 敦煌本『壇經』について

伊吹氏は先ず今までの研究を批判的に吟味しながら、『壇經』のようにその成立に問題があり、しかも傍證する資料に乏しい文献を扱う場合、陥りやすい二つの典型的な、胡適氏と宇井伯寿氏の「壇經考」を例にあげて、その問題点を次のように述べている。

1. 安易な一般化を行なってしまう。
2. 自らの思考の単なる投影に終始してしまう。⁽³⁾

こうした場合、いかに学問的な体裁を取っていても、実際には本格的に研究するより以前に既に結論が出ているのであって、結局は独断だと言わざるを得ないと批判している。また、主要な研究成果の一つである小川隆氏の「敦煌本『六祖壇經』の成立について」に対して、資料そのものから必然的に導かれる結論と著者の想像に過ぎないことが明確に区別されずに議論が進められていたと批判しながら、『壇經』の成立を考えるに当たって是非とも必要とされる要点を次のように提案している。

- a. 全体の構造を見極め、それを視野に入れた上で議論する。
- b. 細部の分析を優先させ、それを積み重ねる形で全体の把握に及ぶという方向性を堅持する。
- c. 各部の前後関係の判定は、根拠となる客観的事実の提示を前提とする。
- d. 推測は、判断するに十分な根拠が存在しない場合のみに限定し、その両者は、可能な限り截然と区別して叙述する。⁽⁴⁾

氏はまた上記の諸要点のため、必然的に要求される具体的方法を次のように提起している。

1. 敦煌本『壇經』を、成立上、それ以上細分して考える必要のない、いくつかのブロックに分ける。
2. 各ブロックを、そこに見られる用語などの客観的な指標によって關聯づけ、より大きないくつかのブロックに統合する。
3. それらの各ブロックを、そこに見られる用語の推移や關聯資料などをもとに、時間的前後関係に配置する。⁽⁵⁾

氏が提案する『壇經』成立の問題を考える場合、共通の認識に至るための前提条件には共感しながらも、その具体的方法にはあまり賛同できない。というのは、氏の方法は一見すれば相当に説得力を持っている。しかし、このような機械論的分析態度が、この文献に含まれている敦煌という辺方の政治的、地理的、言語学的特殊な事情を考慮せずに、しかも先行すべきテキストの校訂や資料の素性を明らかにすることなしに、「細分」や「ブロック」化と「時間的前後関係による再配置」によって、有機体的構造を持っている文献というものの意味や内容の重層的形成過程を明らかにすることが果たして可能であるかどうか疑問である。文献研究の根底になるテキストの校訂は、第一重要な問題である。敦煌本が今まで「比類なき悪本」と呼ばれているので、敦煌本や北京本の出現は、それを見直すよい機会である。もしも間違っているテキストに基づいて、それを細分して客観的な指標によって關聯づけても、間違っているテキストに基づいて論じる場合、その論の根拠にするところが根底から崩れてしまうからである。

敦煌本『壇經』に対する「悪本」という先入観から、研究者はこのテキストの校訂に当たって、文脈が気軽に理解できない場合、すぐ、後に改編の手が加えられている興聖寺本等のテキストを用いるのである。かつて宇井伯寿は、鈴木・公田校訂本に対して、次のような批判を加えた。

学者の補正等は、決して、勝手になしたのではなく、必ず、據る所のあ
ることは判るが、後世の壇經を標準とすれば、補正の為に、意味が異なっ
た場合には、後世の考を入れることになるのであるから、かかる点は、
注意を要するであらうと考えられる。従って、できるだけ、原文通りに
読むべきであらうと思ふのである。⁽⁶⁾

鈴木・公田校訂本の出版から六十年余りの年月が経て、多くの校訂本が出版された。(校訂本文の凡例のうち校訂本の項参照。)

この多くの校訂本には共通の誤りが見受けられ、その根本を辿れば、いずれも鈴木・公田校訂本に至るのであって、その影響力の大きさを示すものと言えよう。スタイン本しか利用できなかった状況と違う、敦博本の影印本や

4 敦煌本『壇經』について

北京本が刊行されている現在にも、その旧態依然たる態度はあまり変わっていないのである。ここで一つの例を挙げてみることにする。『壇經』の中心思想或いは特色で注目されることに無念の宗旨を示しているところがある（鈴木・公田校訂本十七段）。以下興聖寺本と対照してみよう。

敦煌本

善知識、我自法門、從上已來、
頓漸皆立無念為宗、無相為體、
無住為本。何名為相無相。於
相而離相。無念者、於念而不
念。無住者、為人本性。念念
不住、前念念念、後念念念、
相續無有斷絕。

若一念斷絕、法身即是離色身。
念念時中、於一切法上無住。
一念若住、念念即住、名繫縛。
於一切法上、念念不住、即無
縛也。（是）以無住為本。

興聖寺本

善知識、我此法門、從上已來、
先立無念為宗、無相為體、無
住為本。無相者、於相而離相。
無念者、於念而不念。無住者、
人之本性、於世間善惡好醜、
乃至冤之與親、言語觸刺欺爭
之時、並將為空、不思酬害、
念念之中、不思前境。

若前念今念後念、念念相續不
斷、名為繫縛。於諸法上、念
念不住、即無縛也。此是以無
住為本。

端的に言えば、敦煌本の「無念」と「無住」の思想は、人間の実存を念念の心相續という具体的現実から把握することによって、念念が持っている時間的連続性と対象に対する志向性自体を眞理として肯定する存在論の立場を取っているのである。

無住は、人の本性と為す。念念に住せず、前念も念念、後念も念念、相續して断絶あること無し。若し、一念断絶せば、法身即ち是れ色身を離る。

というのは、こういう流れとしての無制約的な時間性から念念を直観して、そのような実存の基礎としての色身を離れて別個の眞理が成立しないということ宣言したのである。

念念時中に、一切の法上に於いて無住なり。一念若し住せば、念念即ち住して、繫縛と名づく。一切の法の上に於いて念念に住せざれば、即ち無縛なり。

敦煌本が言わんとすることは、念念の構造的本質としての連続性と志向性に対する制約は、これを基礎とする実存を否定することになるので、実存の根源的無制約性を自由としての眞理で把握して、これに対するいかなる主観的規定も束縛としての非眞理であることを宣言したのである。

これに対して興聖寺本は、念念をただ執着としての憶念と同一視する。そして、そこから脱すること、即ち否定的な側面から念の断絶を主張しているのである。このような興聖寺本の立場は、結局、存在論的前提なしに、ただ心理学的側面から念念を把握して、敦煌本にはない「於世間善惡好醜、乃至冤之與親、言語觸刺、欺争之時、並將為空不思酬害、念念之中、不思前境。」の一節を挿入して、敦煌本の「前念念念、後念念念、相續無有断絶。若一念断絶、法身即是離色身。」を削除する代わりに、敦煌本とは逆に「若前念今念後念、念念相續不断、名為繫縛、」というのは、この理由である。

従って、敦煌本には同じ意味である「不断」と「不住」の用語が興聖寺本には、反対語になってしまったのである。このような敦煌本（敦煌本も同じ）の「念念不住前念念念後念念念相續無有断絶」をほとんどの校訂本が「念念不住、前念今念後念、念念相續、無有断絶、」に校訂している。

○鈴木・公田校訂本<十七段> p 9

○宇井伯寿『第二禅宗史研究』 p 126

○ Philip B. Yampolsky 『The Platform Sutra of the Sixth Patriarch. .』 p 七

○柳田聖山『禅語録』 p 113、上

○石井修道「恵昕本『六祖壇經』の研究—一定本の試作と敦煌本との対照—」

6 敦煌本『壇經』について

p 124、上

○郭朋『壇經校釋』 p 32

○性徹『敦煌本壇經』 p 127

○劉堅・蔣昭愚主編『近代漢語語法資料彙編唐五代卷』 p 76

○Catherine Toulally『Sixième Patriarche / Sutra de la Plate-Forme. .』 p 120

また、北京本や敦博本の出現以後の

○楊曾文『敦煌新本六祖壇經』 p 17

○伊吹敦「敦煌本『壇經』の形成－惠能の原思想と神会派の展開－」
p 256

もテキストの理解の事情は同じである。

この前念・今念・後念の中国的時間観は、敦煌本には常に前念・後念・今念のインド式時間観である。敦煌本（鈴木・公田<2 2段>）に、

前念後念及今念……自性若除即是懺。

前念後念及今念……永断名為自性懺。

とあって、決して前念、今念、後念の時間観ではない。これはまた、眞福寺本・大乘寺本・金山天寧寺本までは敦煌本と同じく前、後、今の順序になっているのに、なぜ既に宗旨の改編まで手を加えている興聖寺本に依存したのであるか。また北京本や敦博本が出ている今日でも依然として興聖寺本に依存しているのは不思議である。

上に挙げた例と似ているところが、諸先学の校訂本にはずいぶん見られる。強いて、補わなくても十分に、いや、むしろ補わない方が、文章の前後の内容に相應しいところである。これはまた敦博本と北京本によって確認されることである。それらの中、特に顕著なものを掲げれば以下の如くである。（引用は後に掲げる私の校訂本であり、括弧内の数字はその科段である。）

一、「惠能慈父、本官范陽、左降遷流南新州百姓。」（二）

とあるべきを、あらゆる校訂本が「（嶺）南新州百姓」に作る。

（嶺）は、向達手鈔本に冊除符号（ト）が付いている。

二、「善知識、我自法門、從上已來、頓漸皆立無念為宗、無相為體、無住為本。」(十七)

とあるべきを、「頓漸」を衍字として除いている。

三、「善知識、此法門中坐禪、元不着心、亦不着淨、亦不言動。」(十八)
敦煌本、敦博本、北京本も同様であるが、これを殆どの校訂本が「亦不言(不)動」にしている。興聖寺本の「亦不是不動」から補っていると考えられるが、「不」を補わない方が相應しいと考えられる。

四、「與善知識、無相懺悔三世罪障。」(二二)

敦煌本系は全部同様であるのを「無相懺悔、(滅)三世罪障。」にして「滅」を補っているが、原本のまま読める。

二節 『壇經』の具体相 ― 施財について

S. 5475の尾題「南宗頓教最上大乘壇經法一卷」に続いて、次のようなことが書き付けられている。

大乘志三十、大聖志四十、大通志五十、大寶志六十、大法志七十、大德志八十。清之藏志三十、清持藏志四十、清寶藏志五十、清蓮藏志六十、清海藏志七十、大法藏志八十。此是菩薩法號。

これは、敦博本と北京本の最後にも付いているが、研究者から全く注目されていなかった。ただ、敦煌本系の系統を同じくする識語としてしか取り扱われなく、研究から無視されているところである。しかし、何かこのテキストと重要な関わりを持っているように見える。このところの最後に「此は是れ菩薩の法號なり。」ということから、「大乘志、大聖志、……、清海藏志、大法藏志。」が菩薩の法號であることが分かる。この菩薩の法號とは、大乘經典の中に出現する菩薩の名前ではないことは確かである。法號とは戒名であるから、これは菩薩戒を受けた人々の菩薩戒名であることは間違いない。敦煌本『壇經』に特殊な授菩薩戒儀、即ち無相戒授戒儀と何かの関わりを持っていることが推測できるのである。

この戒名は、「大乘志」から「大德志」までの六つの三文字グループと「清

8 敦煌本『壇經』について

之藏志」から「大法藏志」まで同じ六つのグループに区別される。これは、また数字の上からも同じで、「三十」から「八十」まで同じく二つのグループに分けられる。この二つのグループの中で、共通している「志」とは、こころざしとして何か（たぶんお金であろう）を施財したことを現わしているのではなかろうか。数字はその量を示していると思われる。

恵昕本系の『壇經』である金山天寧寺本は、祖統説に末田地を欠いているほかは敦煌本『壇經』に完全に一致することが著しく注目される。即ち、大乘寺本の系譜が後世固定した型であるのに対し、古い祖統説の型を有する敦煌本の面影を残している点で、大乘寺本よりもオリジナルな形態を保っている点で重要である。この天寧寺本の巻末に存する幹縁刻記の謄写の存在は、大乘寺本に比してより古型を保存している証として注目されている⁽⁸⁾。その幹縁刻記の謄写は、以下のようなものである。

僧不遠縁化施財、莫信獎孝恩興室中。陳九娘捨貳貫文。朱最礼、朱、李三娘、各捨壹貫文。鄭誤、宗、陳六娘、各捨壹貫文、省。王勉等十人、各捨伍百文、省。結此勝因、普善果。

勸縁比丘 住保寿庵最樂

都勸縁比丘、住安元報恩禅院賜紫祖印大師紹資 捨貳貫文省。將仕 郎陳 捨俸金貳阡、為母親獎代六娘、願延景福。仙谿林師益、捨俸金貳阡、省、助縁。壇經之費、願一切含靈、得聞此經、不涉二乘、悉証無上菩提。⁽⁹⁾

『普燈錄』六、『五燈会元』十八等に所伝される最樂の勸縁によって、陳九娘、朱最礼等の施財で、『壇經』の刊行の費用として勸縁されたことの刻記である。ここには、四無量心の一つである「捨」を取って「貳貫文」、「俸金貳阡」等を記しているように、敦煌本『壇經』の「……志三十」等も施財した金額を現わしているとも見てよいだろう。

韓国の曹溪宗は、現在も僧侶と在家信者を対象にして、菩薩戒授戒儀式が盛んに行なわれている。先ず、僧侶の場合は、比丘戒を受けてから続いて菩薩戒を同時に受ける。この菩薩戒を受けてから、比丘菩薩と呼ばれるように

なる。この菩薩戒を受けていないと、安居の時布薩に参加することができないのである。菩薩戒を受けているかどうかによって、僧伽の一員になれるかどうかという重要なことである。在家信者の場合、菩薩戒を受けると、戒牒と戒名を頂くのであるが、この場合、男性は法号或いは戒名と呼んで、必ず二文字の戒名を頂き、女性は、普通法名或いは菩薩戒名と呼んで、必ず三文字の戒名を頂く。古くは男性も女性も同じく法号と呼ばれている。

ある夫婦が六祖頂相塔が奉られている雙溪寺の戒壇で菩薩戒を受けた時の戒函とその内容物がある。そこに書かれているのが俗名と法号と呼ばれる菩薩戒名である。ここで確認されるのは、男性信者は、「和譚」という二文字の菩薩戒名であり、女性信者は、「正道心」という三文字の菩薩戒名である。

高麗伝本の徳異本『六祖壇經』の刻記にも「青信女曹氏」が見えるが、それにつづく「大悲華」はその菩薩戒名である。⁽¹⁰⁾女性信者の菩薩戒名には、大抵「〇〇華」とか「〇〇心」など女性姓を象徴する文字が使用されるのが一般的である。

韓国の曹溪宗では「禪宗六祖慧能大師頂相東來縁記」に見える六祖の首を韓国に持ってきたという説話を、『菩提達摩南宗定是非論』等の初期禪宗文献や『景德傳燈録』等の燈史類の六祖頂相切取事件の記事と共に、古くからごく自然に信じているのである。また、実際に雙溪寺には、六祖の頂相を奉安しているという六祖頂相塔が現存している。このことの真実是否は別にしても、少なくとも六祖を初めとする中国禪へのある強力なる宗教的要請が介在されていることは間違いないだろう。このような伝統から分かるように、曹溪宗には唐代禪宗の形式や習慣、ないし禪風が根強く残っているのである。

以上のことから敦煌本『壇經』のこの法号は、男性、女性の戒名であり、この戒名の中に男性の「大」字、女性の「清」字が用いられていることがうかがわれる。またこれらの人々は兄弟弟子の関係にあるのであろうし、「蔵」の字は恐らく女性姓の象徴であろうと思われる。

これらの点から考えられることは、このテキストを中心にした教団或いは一派の在家信者たちの中で、六人づつの男性、女性信者が、この本に含まれ

10 敦煌本『壇經』について

ている無相戒授戒によって受戒し、この一派に施財したことを示す記録ではないのかと推定されるのである。

注

- (1) : 柳田聖山「壇語と壇經」(『仏光山国際禅学会議実録』、仏光出版社、1990年3月) p 42
- (2) : 『禅学研究』17、18号、1932年
- (3) : 伊吹敦「敦煌本『壇經』の形成－惠能の原思想と神会派の展開－」(『論叢アジアの文化と思想』第4号、アジアの文化と思想の会、1995年12月) p 8
- (4) : 伊吹敦、前掲論文 p 10
- (5) : 伊吹敦、前掲論文 p 10～11
- (6) : 宇井伯寿『第二禅宗史研究』 p 53
- (7) : 興聖寺本は、中川孝氏の『六祖壇經一禅の語録4』(筑摩書房、1976年11月)を用いた。
- (8) : 椎名宏雄「金山天寧寺旧蔵『六祖壇經』について」(『印仏研』23巻2号、昭和50年<1975>3月) p 293
- (9) : 柳田聖山『六祖壇經諸本集成』(中文出版社、1976年7月) p 88
- (10) : 前掲書 p 163

敦煌本『壇經』の校訂本

「凡 例」

一、ここで使用したテキストは、下記の如くである。

敦煌本

- 英国図書館蔵本（S. 5475, 一卷一冊、筆写本 原本）（以下（底）本と略す）
- 敦煌市博物館蔵本（敦博077、任繼愈編『中国仏教叢書・禅宗編』、江蘇古籍出版社、1993年）（以下（D）本と略す）
- 北京図書館蔵本（北図8024背面残卷、黄永武編『敦煌宝蔵』第108冊、新文豊出版公司、1983年）（以下（P）本と略す）
- 旅順博物館所蔵本（大谷光瑞照片二葉、井ノ口泰淳、白田淳三、田中篤郎共編『舊関東廳所蔵大谷探検隊将来文書目録』、『舊関東廳所蔵大谷探検隊将来文書目録（図版）』（西域出土仏典研究班、1989年）（以下（R）本と略す）

西夏文本

- 史金波『西夏文「六祖壇經」残頁譯釋』（『世界宗教研究』第3期、1993年）（以下（史）本と略す）

恵昕本

- 真福寺本（石井修道「伊藤隆壽氏発見の真福寺文庫所蔵の『六祖壇經』の紹介—恵昕本『六祖壇經』の祖本との関連—」（『駒沢大学仏教学部論集』第10号、1979年）（以下（真）本と略す）
- 金山天寧寺本（柳田聖山『六祖壇經諸本集成』、中文出版社、1976年）（以下（天）本と略す）
- 大乘寺本（柳田聖山『六祖壇經諸本集成』、中文出版社、1976年）（駒沢大学禅宗史研究会編『慧能研究』、大修館書店、1978年）（以下（大）本と略す）
- 興聖寺本（柳田聖山編『六祖壇經諸本集成』、中文出版社、1976年）（駒沢大学禅宗史研究会編『慧能研究』、大修館書店、1978年）（以下（興）

12 敦煌本『壇經』について

本と略す)

校訂本

- 鈴木貞太郎・公田連太郎『敦煌出土六祖壇經』(森江書店、1934年)(以下(鈴)本と略す)
- 宇井伯壽「壇經考」(1941年、『第二禪宗史研究』、岩波書店)
(以下(宇)本と略す)
- Philip B. Yamposky 『The Platform Sutra of the Sixth patriarch.』(Columbia University Press, 1967)(以下(Y)本と略す)
- 柳田聖山『禪語録』(中央公論社、1974年)(以下(柳)本と略す)
- 石井修道「恵昕本『六祖壇經』の研究一定本の試作と敦煌本の対照」
(『駒沢大学仏教学部論集』第11、12号、1980、1981年)(以下(石)本と略す)
- 郭 朋『壇經校釋』(中華書局、1983年)(以下(郭)本と略す)
- 退翁性徹譯『敦煌本壇經』(藏經閣、1988年)(以下(性)本と略す)
- 金知見校注『敦煌六祖壇經』(『六祖壇經の世界』、民族社、1989年)(以下(金)本と略す)
- 劉堅・蔣昭愚主編『近代漢語語法資料彙唐五代卷』(商務印書館、1990年)(以下(劉)本と略す)
- 田中良昭「敦煌本『六祖壇經』諸本の研究—特に新出の北京本の紹介—」
(『松ヶ岡文庫研究年報』第5号、1991年)(以下(田)本と略す)
- Catherine Toulssaly 『Sixieme Patriache / Sutra de la Plate-Form.』(Librairie You Feng、1992年)(以下(T)本と略す)
- 楊曾文校写『敦煌新本六祖壇經』(上海古籍出版社、1993年)(以下(楊)本と略す)
- 潘重規『敦煌壇經新書』(佛陀教育基金会、1994年)(以下(潘)本と略す)

○伊吹敦「『壇經』の形成—恵能の原思想と神会派の展開—」(『アジアの文化と思想』第4号、アジアの文化と思想の会、1995年)(以下(伊)本と略す)

- 一、この校訂本は、上記の多くの諸先学校訂本の成果を参照した。
- 一、校訂に際しては、S. 5475を底本にし、上記の敦煌3本を用いて校合した。尚、不十分な場合には、恵昕本の(真)本・(天)本・(大)本・(興)本を用いたが、今までの諸先学の校訂本の大部分が(興)本によって間違いを生じているので、脱興聖寺本を念頭においた。以上の諸本によっても尚、不明な場合には、上記の校訂本を参照にした。またごく一部であるが、前後の文脈から補った字句もある。()の中の字は、底本にはないものを補ったことを表す。
- 一、特に必要のない限り、当用漢字で表記した。尚、(鈴)本の分段番号をそのまま利用した。
- 一、原文の姿をできるだけ残すため、底本の中にありながら不要とみられる字句は、注の中に残しておいた。いずれも異同のある場合には、本文の最初の文字の上に番号を付し、異同の内容を注で示した。また同一文字の繰り返しの誤字には・点を文字の上側に示した。

この校訂にあつて、古賀英彦先生から多くの御教示を得た。特に、衣川賢次先生の御厚意によって、『俗語言研究』第三期(1996年6月)にのせる予定の「『敦煌新本六祖壇經』補校」(以下(衣)補校と略す)の原稿を早く頂き、参考にした。

南宗頓教最上大乘摩訶般若波羅蜜經

六祖惠能大師於韶州大梵寺施法壇經一卷。

兼受相戒弘法弟子法海集記。

一、惠能大師、於大梵寺講堂中、昇高座、說摩訶般若波羅蜜法、授無相戒。⁽¹⁾
其時座下僧尼道俗、一萬餘人。韶州刺史韋據⁽²⁾、及諸官寮三十餘人、儒士餘人⁽³⁾、
同請大師說摩訶般若波羅蜜法。刺史韋遂令門人僧法海集記、流行後代。與學
道者、承此宗旨、遞相傳授、有所依約⁽⁴⁾、以爲稟承、說此壇經。

校記

- (1) : (底) 本は受、(興) 本にて改む。
(2) : (底) 本は「等」、(興) 本にて改む。(D) 本は「違處」。
(3) : (底) 本は「士」、(D) 本にて改む。
(4) ; (底) 本は「於」、(D) 本にて改む。

二、能大師言、善知識、淨心念摩訶般若波羅蜜法。大師不語、自淨心神。
良久乃言、善知識、靜聽。惠能慈父、本官范陽、左降遷流南新州百姓幼少。⁽¹⁾
惠亦能⁽⁴⁾、父早亡、老母孤遺、移來⁽⁵⁾(南)海、艱辛貧乏⁽⁶⁾、於市賣柴⁽⁷⁾。忽有一客買
柴、遂領惠能、至於官店。客將柴去、惠能得錢。却向門前、忽見一客讀金剛
經。惠能一聞、心明便悟⁽⁸⁾。乃問客曰⁽⁹⁾、從何處來、持此經典。客答曰、我於(州
黃梅縣東馮墓山禮拜五祖弘忍和尚⁽¹⁰⁾。見今在彼⁽¹¹⁾、門人有千餘衆。我於彼聽見大
師勸道俗、但持金剛經一卷⁽¹²⁾、即得見性、直了成佛。惠能聞說、宿業有緣、便
即辭親、往黃梅墓山、禮拜五祖弘忍和尚。

校記

- (1) : (底) 本は「淨」、(Y) 本にて改む。
(2) : (D) 本には「流」の下に「嶺」の字が有るが、向達の手鈔本に
よって刪除符号「ト」が付いていることを確め得る。
(3) : (底) 本は「小」、(D) 本にて改む。

- (4) : (底) 本は「小」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (6) : (底) 本は「之」、(D) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「買」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「名」、(D) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は「聞」、(D) 本にて改む。
- (10) : (底) 本は「懸」、(D) 本にて改む。
- (11) : (底) 本は「令」、(D) 本にて改む。
- (12) : (底) 本は「特」、(D) 本にて改む。

三、弘忍和尚問惠能曰、汝何方人、來此山、禮拜吾。汝今向吾邊、復求何物。惠能答曰、弟子是嶺南人、新州百姓。今故遠來、禮拜和尚、不求餘物、唯求作佛法。大師遂責惠能曰、汝是嶺南人、又是獼猴。若爲堪作佛。惠能答曰、人即有南北、佛性即無南北。獼猴身與和尚不同、佛性有何差別。大師欲更共議、見左右在傍邊、大師更不言。遂發遣惠能、令隨衆作務。時有一行者、遂差惠能於碓坊、踏碓八箇餘月。

校記

- (1) : (底) 本は「領」、敦煌俗写で「嶺」と「領」に作る。(D) 本にて改む。
- (2) : (底) 本は「佛法作」、(石) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「領」、(D) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (6) : (D) 本は「著」。

四、五祖忽於一日、喚門人盡來。門人集訖、五祖曰、吾向汝說、世人生死事大。汝等門人、終日供養、只求福田、不求出離生死苦海。汝等自性迷、福

16 敦煌本『壇經』について

門何可救汝。汝⁽⁴⁾惣且歸房自看。有智⁽⁵⁾惠者、自取本性⁽⁶⁾般若之智⁽⁷⁾、各作一偈⁽⁸⁾呈吾。
吾看汝偈、若⁽⁹⁾悟大意者、付汝衣法、稟爲六代。火急急。

校記

- (1) : (底) 本は「記」、(Y) 本にて改む。
- (2) : (底) 本は「与」、(D) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (4) : 「總」の俗字。
- (5) : (底) 本は「知」、(D) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「白」、(D) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「知」、(D) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は「吾」、(D) 本にて改む。
- (10) : (D) 本は「作」。

五、門人得處分、却來各至自房、遞相⁽¹⁾謂言、我等不須呈心、用意作偈、將
呈和尚。神秀上座⁽²⁾是教授師。秀上座得法後、自可依止⁽³⁾、請不用作。諸人息心、
盡不敢呈偈。時大師堂前、有三間房廊。於此廊下供養⁽⁴⁾欲畫楞伽變、并畫五祖
大師傳授衣法⁽⁵⁾、流行後代爲記。畫人盧珍⁽⁶⁾看壁了、明日下手。

校記

- (1) : (底) 本は「白」、敦煌俗写で「白」と「自」は通用す。(D) 本
にて改む。
- (2) : (D) 本には「是」の下に「故」の字有り。
- (3) : (底) 本は「於」、(D) 本にて改む。
- (4) : (D) 本は無し。
- (5) : (D) 本は「於」。
- (6) : (底) 本は「玲」、(興) 本にて改む。(D) 本「唐玲」

六、上座神秀思惟、諸人不呈心偈、緣我爲教授師。我若不呈心偈、五祖如何得見我心中見解深淺。我將心偈上五祖呈意即善、求法覓祖不善。却同凡心奪其聖位。若不呈心、終不得法。⁽²⁾良久思惟、甚難甚難。甚難甚難。夜至三更、不令人見、遂向南廊下中間壁上、題作呈心偈、欲求衣法。⁽⁴⁾若五祖見偈、言此偈語、若訪覓我、我⁽⁵⁾（見和尚、即云是秀作。五祖見偈、言不堪、自是我迷、）宿業障重、不合得法。聖意難測、我心自息。⁽⁷⁾秀上座、三更、於南廊下中間壁上、秉燭題作偈、人盡不知。偈曰、

身是菩提樹、心如明鏡臺。

時時勤⁽⁹⁾拭、莫使有塵埃。

校記

(1) : (底) 本は「」、(D) 本にて改む。

(2) : (底) 本は「修」、(真) 本にて改む。

(3) : (底) 本は「問」、(D) 本にて改む。

(4) : (底) 本は「於」、(D) 本にて改む。

(5) : (底) 本の「語」は(悟)の誤写か。

(6) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。

(7) : (底) 本は「白」、(D) 本にて改む。

(8) : (底) 本は「和」、(D) 本にて改む。

(9) : (底) 本は「佛」、(D) 本にて改む。

七、神秀上座、題此偈畢、⁽¹⁾（却）歸房臥、並無人見。五祖平旦、遂喚盧供奉來、南廊下畫楞伽變。五祖忽見此偈、⁽³⁾誦訖乃謂供奉曰、弘忍與供奉錢三十千、深勞遠來、不畫變相也。金剛經云、凡所有相、皆是虛妄。不如留此偈、令迷人誦。依此修行、不墮三惡。依法修行、人有大利益。大師遂喚門人盡來、焚香偈前。⁽⁵⁾人衆入見、皆生敬心。汝等盡誦此偈者、方得見性。⁽⁶⁾依此修行、即不墮落。門人盡誦、皆生敬心、喚言善哉。⁽⁸⁾五祖遂喚秀上座於堂內間、是汝作偈

否。若是汝作、應得我法。秀上座言、罪過、實是神秀作、不敢求祖。⁽¹⁰⁾願和尚慈悲、看弟子有小智惠、識大意否。⁽¹¹⁾五祖曰、汝作此偈、⁽¹²⁾見即來到。只到門前、尚未得入。凡夫依此偈修行、即不墮落。⁽¹³⁾作此見解、若覓無上菩提、⁽¹⁴⁾即未可得。⁽¹⁵⁾須入得門、⁽¹⁶⁾見自本性。汝且去、一兩日來思惟、⁽¹⁷⁾更作一偈來呈吾。若入得門、⁽¹⁸⁾見自本性、⁽¹⁹⁾當付汝衣法。秀上座去、⁽²⁰⁾數日作不得。

校記

- (1) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (2) : (底) 本は「換」、(D) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「請記」、(Y) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「流」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「人」、(D) 本は「衆人見已」。
- (6) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「於」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「褐」、(D) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は「門」、(興) 本にて改む。
- (10) : (D) 本は「但」。
- (11) : (底) 本は「褐」、(D) 本にて改む。
- (12) : (D) 本は「見解只到門前」。
- (13) : (底) 本は「於」、(D) 本にて改む。
- (14) : (D) 本は「不」。
- (15) : (D) 本は「要」。
- (16) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (17) : (D) 本は無し。
- (18) : (D) 本は無し。
- (19) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (20) : (D) 本には「作」の下に「偈」の字有り。

八、有一童子、於碓坊邊過、⁽¹⁾唱誦此偈。⁽²⁾惠能一聞、知未見性、⁽³⁾即識大意。
 能問童子、適來誦者是何言偈。童子答能曰、⁽⁴⁾（不知、大師言、生死事大、欲傳
⁽⁵⁾衣法、令門人等、各作一偈來呈、看悟大意即付衣法、稟爲六代祖。⁽⁶⁾有一上座
 名神秀、忽於南廊下、書無相偈一首。⁽⁷⁾五祖令諸門人盡誦、悟此偈者即見自性、⁽⁸⁾
 依此修行、即得出離。惠能答曰、我此踏碓八箇餘月、未至堂前。望上人引惠
 能至南廊下。見此偈禮拜、亦願誦取、結來生緣、願生佛地。童子引能至南廊
 下。能即禮拜此偈。爲不識字、請一人讀。惠⁽⁹⁾（能）⁽¹⁰⁾聞已、即識大意。惠能亦
 作一偈、又請得一解書人、於西間壁上題著、呈自本心。⁽¹¹⁾不識本心、學法無益。
 識心見性、⁽¹²⁾即悟大意。⁽¹³⁾惠能偈曰、

菩提本無樹、明鏡亦無臺。

⁽¹⁴⁾佛性常清淨、⁽¹⁵⁾何處有塵埃。

又偈曰、

心是菩提樹、身爲明鏡臺。

明鏡本清淨、何處染塵埃。

院內徒衆見能作此偈盡⁽¹⁶⁾恠。惠能却入碓坊。⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾五祖忽見惠能偈、⁽¹⁹⁾即知識大意。⁽²⁰⁾恐
 衆人知、五祖乃謂衆人曰、此亦未得了。

校記

- (1) : (D) 本は「此」
- (2) : (D) 本には「能」の下に「及」の字有り。
- (3) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「是」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「於」、(D) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「偈」、(D) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「偈」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (10) : (底) 本は「問」、(D) 本にて改む。

- (11) : (底) 本は「提」、(D) 本にて改む。
(12) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
(13) : (底) 本は「吾」、(Y) 本にて改む。
(14) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
(15) : (底) 本は「青」、(D) 本にて改む。
(16) : (底) 本は「埴」、(D) 本にて改む。
(17) : (底) 本は「褐」、(D) 本にて改む。
(18) : (D) 本には「忽」の下に「来廊下」の字有り。
(19) : (底) 本は「但」、(D) 本にて改む。
(20) : (底) 本は「即善知識大意」とする。(D) 本にて改む。

九、五祖夜至三更、喚惠能堂内、説金剛經。惠能一聞、言下便悟⁽²⁾。其夜受法、人盡不知。便傳頓法及衣、汝爲六代祖、衣將爲信稟⁽⁵⁾、代代相傳、法以心傳心、當令自悟。五祖言、惠能、自古傳法、氣如懸絲、若住此間、有人害汝。汝即須速去。

校記

- (1) : (底) 本は「知」、(D) 本にて改む。
(2) : (底) 本は「伍」、(真) 本にて改む。
(3) : (D) 本は「教」。
(4) : (D) 本は「以」。
(5) : (D) 本は「將衣」。
(6) : (D) 本は「茲」。

十、能得衣法、三更發去。五祖自送能於九江驛。登時便⁽¹⁾、(別)⁽²⁾、五祖處分、汝去努力、將法向南、三年勿弘、此法難起、在後弘化、善誘迷人。若得心開、⁽³⁾汝悟無別。辭違已了、便發向南。⁽⁴⁾

校記

- (1) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
 (2) : (底) 本は「悟」、(D) 本にて改む。
 (3) : (底) 本は「去」、(D) 本にて改む。
 (4) : (D) 本は「与悟無別」。

十一、兩月中旬、至大るる⁽¹⁾庾嶺。不知向後有數百人來、欲擬捉⁽²⁾惠能、奪衣法。來至半路、盡惣却迴。唯有一僧、姓陳、名惠順、先是三品將軍、性行⁽³⁾龜惡。直至嶺上、來趁把著。惠能即還法衣、又不肯取。我故遠來求法、不要其衣。能於嶺上、便傳法惠順。惠順得聞、言下心開。能使惠順即却向北化人來。

校記

- (1) : (底) 本は「頭」、(D) 本にて改む。
 (2) : (底) 本は「於」、(D) 本にて改む。
 (3) : (D) 本に無し。

十二、惠能來於⁽¹⁾此地、與諸官寮⁽²⁾道俗、亦有累劫之因。教是先聖所傳、不是惠能自知。願聞⁽⁴⁾先聖教者、各須淨心、聞了願自除迷、如先代⁽⁵⁾悟。下是法。惠能大師喚言、善知識、菩提般若之⁽⁷⁾智、世人本自有之。即緣心迷、不能自悟。須求大善知識示導見性。善知識、(愚人、⁽⁸⁾智人、佛性本亦無差別、只緣迷悟、迷即為⁽¹⁰⁾愚、悟即成智。

校記

- (1) : (底) 本は「衣」、(D) 本にて改む。
 (2) : (底) 本は「奪」、(D) 本にて改む。
 (3) : (底) 本は「性」、(D) 本にて改む。
 (4) : (底) 本は「性」、(D) 本にて改む。
 (5) : (底) 本は「餘」、(D) 本にて改む。

22 敦煌本『壇經』について

- (6) : (底) 本は「於」、(D) 本にて改む。
(7) : (底) 本は「知」、(D) 本にて改む。
(8) : (底) 本は () の文は無し、(D) 本にて補う。
(9) : (D) 本には「知」、(楊) 本にて改む。
(10) : (底) 本は「遇」、(D) 本にて改む。

十三、善知識、我此法門、以定惠爲本。第一勿迷言惠定別。定惠體一不二。即定是惠體、即惠是定用。即惠之時定在惠、即定之時惠在定。善知識、此義即是⁽¹⁾ (定) 惠等。學道之人作意、莫言先定發惠、先惠發定、定惠各別。作此見者、法有二相。口說善、心不善、惠定不等。心口俱善、内外一種⁽²⁾、定惠即等。自悟修行、不在口諍。若諍先後、即是⁽³⁾ (迷) 人、不斷勝負、却生法我、不離四相。

校記

- (1) : (底) 本は無し、(真) 本にて補う。
(2) : (底) 本は「一衆種」、(D) 本にて改む。
(3) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。

十四、一行三昧者、於一切時中、行住坐臥、常行直心⁽¹⁾是。淨名經云、直心⁽⁴⁾是道場、直心⁽⁵⁾是淨土。莫心行諂曲⁽⁶⁾、口說法直⁽⁷⁾。口說一行三昧、不行直心、非佛弟子。但行直心、於一切法上⁽⁸⁾、無有執著、名一行三昧。迷人著法相、執一行三昧、直心坐不動、除妄不起心、即是一行三昧。若如是、此法同無情、却是障道因緣。道須通流、何以却滯。心(不)住即通流、住即被縛⁽¹⁵⁾。若坐不動是、維摩詰不合呵舍利弗宴坐林中。善知識、又見有人教坐、看心看淨、不動不起、從此置功。迷人不悟、便執成顛、即有數百般。如此教道者、故知大錯。

校記

- (1) : (底) 本は「座」、(D) 本にて改む。

- (2) : (底) 本は「眞」、(D) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「真」、(真) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「真」、維摩經菩薩品にて改む。
- (5) : (底) 本は「真」、維摩經菩薩品にて改む。
- (6) : (底) 本は「典」、(D) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「真」、(真) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「真」、(真) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は「無上」、(D) 本にて改む。
- (10) : (底) 本は「真」、(真) 本にて改む。
- (11) : (底) 本は「座」、(D) 本にて改む。
- (12) : (底) 本は「清」、(D) 本にて改む。
- (13) : (底) 本は「順」、(D) 本にて改む。
- (14) : (底) 本は「在住」、(石) 本にて改む。
- (15) : (底) 本は「彼」、(石) 本にて改む。
- (16) : (底) 本は「座」、(D) 本にて改む。
- (17) : (底) 本は「座」、(D) 本にて改む。
- (18) : (底) 本は「座」、(D) 本にて改む。
- (19) : (D) 本には無し。
- (20) : (D) 本には「顛」の下に「倒」の字有り。
- (21) : (底) 本は「盤」、(D) 本にて改む。
- (22) : (底) 本は「之」、(D) 本にて改む。

十五、善知識、定惠猶如何等。如燈光。有燈即有光、無燈即無光。燈是光⁽¹⁾之體、光是燈之用。⁽²⁾(名) 即有二、體無兩般。此定惠法、亦復如是。

校記

- (1) : (底) 本は「知」、(D) 本にて改む。
- (2) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。

十六、善知識、法無頓漸、人有利鈍。⁽¹⁾迷即漸勸、悟人頓修。識自本⁽²⁾（心）、是見本性。悟即元無差別、不悟即長劫輪迴。

校記

(1) : (底) 本は「明」、(D) 本にて改む。

(2) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。

十七、善知識、我自法門、從上已來、頓漸皆立無念⁽¹⁾為宗、無相⁽²⁾為體、無住⁽³⁾為本。何名為相無相。於相而離相。無念者、於念而不念。無住者、為入本性。⁽⁴⁾念念不住、前念念念、後念念念、相續無有斷絕。⁽⁵⁾若一念斷絕、法身即是離色身。念念時中、於一切法上無住。一念若住、念念即住、名繫縛。⁽⁶⁾於一切法上、念念不住、即無縛也。⁽⁷⁾(是) 以無住為本。善知識、外離一切相、是無相。但能離相、性體清淨。⁽⁸⁾是以無相為體。⁽⁹⁾於一切境上不染、名為無念。⁽¹⁰⁾於自念上離境、⁽¹¹⁾不於法上念生。莫百物不思、念盡除却。一念斷即死、別處受生。⁽¹²⁾學道者用心、莫不識法意。⁽¹³⁾自錯尚可、更勸他人迷。⁽¹⁴⁾不自見迷、又謗經法。是以立無念為宗。即緣迷人於境上有念、⁽¹⁵⁾念上便起邪見、⁽¹⁶⁾一切塵勞妄念、⁽¹⁷⁾從此而生。然此教門立無念為宗。世人離見、不起於念。⁽¹⁸⁾若無有念、無念亦不立。無者無何事。念者⁽¹⁹⁾(念) 何物。無者離二相諸塵勞。⁽²⁰⁾(念者念真如本性)。真如是念之體、念是真如之用。⁽²¹⁾性起念、雖即見聞覺知、⁽²²⁾不染萬境、⁽²³⁾而常自在。⁽²⁴⁾維摩經云、外能善分別諸法相、內於第一義而不動。

校記

(1) : (底) 本は「無」、(D) 本にて改む。

(2) : (底) 本は「無」、(D) 本にて改む。

(3) : (底) 本は「為」の上に「無」の字あり、(D) 本に従い削除。

(4) : (底) 本は「明」、(D) 本にて改む。

(5) : (底) 本は「讀」、(D) 本にて改む。

- (6) : (底) 本は「撃」、(D) 本にて改む。
 (7) : (底) 本は無し、(真) 本にて補う。
 (8) : (底) 本は「浄」の下に「是」の字あり、(D) 本に従い削除。
 (9) : (底) 本は「鏡」、(D) 本にて改む。
 (10) : (底) 本は「鏡」、(D) 本にて改む。
 (11) : (底) 本は「不」の上に「不」の字あり、(D) 本に従い削除。
 (12) : (底) 本は「即无」、(興) 本にて改む。
 (13) : (底) 本は「息」、(D) 本にて改む。
 (14) : (底) 本は「白」、(D) 本にて改む。
 (15) : (底) 本は「名」、(D) 本にて改む。
 (16) : (底) 本は「鏡」、(D) 本にて改む。
 (17) : (底) 本は「去」、(D) 本にて改む。
 (18) : (D) 本は「離境」。
 (19) : (底) 本は無し、(真) 本にて補う。
 (20) : (底) 本は無し、(真) 本にて補う。
 (21) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
 (22) : (底) 本は「之」、(D) 本にて改む。
 (23) : (底) 本は「鏡」、(D) 本にて改む。
 (24) : (底) 本は「白」、(D) 本にて改む。

十八、善知識⁽¹⁾、此法門中坐禪⁽²⁾、元不著心、亦不著淨、亦不言動。若言看心、心元是妄、妄如幻故⁽³⁾、無所看也。若言看淨⁽⁴⁾、人性本淨⁽⁵⁾、爲妄念故、蓋覆眞如。離妄念⁽⁶⁾、本性淨⁽⁷⁾。不見自性本淨⁽⁸⁾、起心看淨⁽⁹⁾、却生淨妄⁽¹⁰⁾。妄無處所、故知看者却是妄也。淨無形相、却立淨相、言是功夫、作此見者⁽¹¹⁾、障自本性⁽¹²⁾、却被淨縛。若不動者⁽¹³⁾、(不)見一切人過患、是性不動。迷人自身不動、開口即說人是非、與道違背。看心看淨、却是障道因緣。

- (1) : (底) 本は「諸」、(D) 本にて改む。
- (2) : (底) 本は「座」、(真) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「幼」、(D) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (5) : ここから (P) 本有り。
- (6) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「心起」、(D) 本にて改む。
- (9) : (P) 本は無し。
- (10) : (底) 本は「者」の下に「看」の字あり、(Y) 本に従い削除。
- (11) : (底) 本は「章」、(D) 本にて改む。
- (12) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (13) : (底) 本は無し、(真) 本にて補う。

十九、今既⁽¹⁾如是、此法門中、何名⁽²⁾坐禪。此法門中、一切無礙、外於一切境界上、念不起爲坐、⁽³⁾(内)⁽⁴⁾見本性不亂爲禪。何名爲禪定。⁽⁶⁾外離相曰禪、内不亂曰定。外若有相、内性不亂、⁽⁷⁾本自淨自定。只緣境触、⁽⁸⁾触即亂、⁽⁹⁾離相不亂即定。外離相即禪、⁽¹⁰⁾内不亂即定。外禪内定、故名禪定。維摩經云、即時豁然、⁽¹¹⁾還得本心。菩薩戒經云、本源自性清淨。⁽¹²⁾善知識、見自性自淨、⁽¹³⁾自修自作、⁽¹⁴⁾自性法身、⁽¹⁵⁾自行佛行、自作自成佛道。

校記

- (1) : (底) 本は「今記汝是」。(D)、(P) 本は「今記如是」。
- (2) : (底) 本は「座」、(真) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「去」、(D)、(P) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は無し、(真) 本にて補う。
- (5) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「雜」、(D)、(P) 本にて改む。

- (7) : (D)、(P) 本は「本性自淨曰定」。
 (8) : (D) 本は「解」。
 (9) : (D) 本は「解」。
 (10) : (底) 本は「不」の上に「外」の字あり、(D) 本に従い削除。
 (11) : (底) 本は「是」、(D)、(P) 本にて改む。
 (12) : (底) 本は「本須白姓清淨」、『梵網經』にて改む。
 (13) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
 (14) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
 (15) : (D)、(P) 本は無し。

二十、善知識、總須自⁽¹⁾聽、與受無相戒。一時逐惠能口道。⁽²⁾令善知識見自三身佛。

於自色身、歸依清淨法身佛。

於自色身、歸依千百億化身佛。

於自色身、歸依當來圓滿報身佛。已上三唱

色身是舍宅、不可言歸向者。三身⁽⁷⁾在自法性、世人盡有、爲迷不見。外覓⁽⁸⁾三身⁽⁹⁾如來、不見自色身中三性佛。善知識聽。與善知識說、令善知識於自色身、見自法性有三世佛。此三身佛、從性⁽¹⁴⁾上生。何名清淨⁽¹⁵⁾身佛。善知識、世人性本自淨、萬法在自性。思量一切⁽¹⁶⁾（惡）事、即行於惡⁽¹⁷⁾（行）。思量一切善事、便修於善行。知如是一切法、盡在自性、自性常清淨。日日常明、只爲雲覆蓋、上明下暗、不能了見日月星辰。忽遇惠風吹散、卷盡雲霧、萬像參羅、一時皆現。世人性淨、猶如清天。惠如日、智如月。智惠常明、於外著境、妄念浮雲蓋覆、自性不能明。故遇善知識開真⁽²⁵⁾（正）法、吹却迷妄、內外明徹、於自性中、萬法皆見。一切法自在性、名爲清淨法身。自歸依者、除不善行、是名歸依⁽³⁷⁾。何名爲千百億化身佛。⁽³⁸⁾不思量、性即空寂、思量即是自化。思量惡法、化爲地獄。思量善法、化爲天堂。毒害化爲畜生、慈悲化爲菩薩、智惠化爲上界、愚癡化爲下方。自性變化甚多、迷人自不知見。一念善、智惠即生、一燈能除千年闇、一智能滅萬年愚。莫思向前、常思於後、常後念善、名爲報身。一念

惡報却千年善止、一念善報却千年惡滅。無常已來、後念善、名爲報身。從法身思量、即是化身。念念善、即是報身。自悟自修、即名歸依也。皮肉是色身、⁽⁴⁴⁾是舍宅、不在歸依也。⁽⁴⁵⁾但悟三身、即識大意。⁽⁴⁶⁾

校記

- (1) : (底) 本は (体)、(D)、(P) 本により改む。「聽」と「體」は河西方言で通用す。(衣) 補校参照。
- (2) : (P) 本は「今」。
- (3) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (6) : (D)、(P) 本は「身」。
- (7) : (P) 本は「自在」。
- (8) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (10) : (D) 本は「不見自色身中三世佛」、(P) 本は「不見色身中三世佛」
- (11) : (底) 本は「汝」、(D)、(P) 本にて改む。
- (12) : (P) 本は「今」。
- (13) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (14) : (D)、(P) 本には「從」の下に「自」の字有り。
- (15) : (底) 本は無し、(真) 本にて補う。
- (16) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (17) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (18) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (19) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (20) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (21) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本は「自性」の二字無し。

- (22) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (23) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (24) : (底) 本は「西」、(D)、(P) 本にて改む。
- (25) : (P) 本は「智如月」無し。
- (26) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (27) : (底) 本は「看敬」、(真) 本にて改む。
- (28) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (29) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (30) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (31) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (32) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (33) : (D)、(P) 本は「現」。
- (34) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。(D) 本は「在自性」。
- (35) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (36) : (D)、(P) 本は「除不善心及不善行」。
- (37) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (38) : (P) 本は「不可思量」。
- (39) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (40) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (41) : (底) 本は「知」、(D)、(P) 本にて改む。
- (42) : (底) 本は「心」、(柳) 本にて改む。
- (43) : (底) 本は「常」、(宇) 本にて改む。
- (44) : (D)、(P) 本には無し。
- (45) : (底) 本は「衣」、(興) 本にて改む (D)、(P) 本は無し。
- (46) : (底) 本は「億」、(D) 本にて改む。

二一、今既自歸依三身佛已。與善知識、發四弘大願。善知識、一時逐惠能道。

衆生無邊誓願度。

煩惱無邊誓願斷。

法門無邊誓願學。

無上佛道誓願成。三唱

善知識、衆生無邊誓願度、不是惠能度。善知識心中衆生、各於自身、自性⁽¹⁾自度。何名自性自度。自色身中、邪見煩惱、愚癡迷妄、自有本覺性、將正見度。⁽²⁾既悟正見般若之智、除却愚癡迷妄、衆生各各自度。邪來正度、迷來悟度、愚來智度、惡來善度、煩惱來菩提度。⁽³⁾如是度者、是名眞度。煩惱無邊誓願斷、自心除虛妄。法門無邊誓願學、學無上正法。無上佛道誓願成、常下心行、恭敬一切。遠離迷執、覺智生般若。⁽⁴⁾除却迷妄、即自悟佛道行成誓願力。⁽⁵⁾

校記

- (1) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (2) : (D) 本は「度」無し、(P) 本は「自度」無し。
- (3) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「名」、(D) 本にて改む。
- (5) : (D) (P) 本は「性」の下に「只本覺性」の四字有り。
- (6) : (底) 本は「見」、(眞) 本にて改む。(D) (P) 本は「邪來正度」の字無し。
- (7) : (底) 本は「薩」、(D)、(P) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「知」、(D)、(P) 本にて改む。
- (9) : (P) 本は無し。

二、今既發四弘誓願訖。⁽¹⁾與善知識、無相懺悔三世罪障。大師言、善知識、前念後念及今念、念⁽²⁾(念)不被愚迷染、從前惡行、一時自性若除、即是懺悔。前念後念及今念、念念⁽³⁾(不)被愚癡染、除却從前矯誑心、永斷名爲自性懺。⁽⁴⁾前念後念及今念、念念⁽⁵⁾不被疾疢染、除却從前嫉妬心、自性若除即是懺。已上三唱 善知識、何名懺悔。⁽⁶⁾(懺)者終身不作、悔者知於前非。惡業恒不離心、

諸佛前口說無益。我此法門中、永斷不作、名爲懺悔。

校記

- (1) : (D) 本は「即」。
- (2) : (D) (P) 本は「説」。
- (3) : (底) 本は無し。(P) 本にて補う。
- (4) : (P) 本は「遇」。
- (5) : (D) 本は「前惡」を「何西」に作る。(P) 本は「惡」を「西」に作る。
- (6) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (7) : (D) 本は脱す。
- (8) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (9) : (D) (P) 本は「前」を「何」、「誑」を「雜」に作る。
- (10) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (11) : (底) 本は「」、(D) 本にて改む。
- (12) : (底) 本は「垢」、(鈴) 本にて改む。。
- (13) : (底) 本は無し、(鈴) 本にて補う。
- (14) : (底) 本は「葉」、(D) 本にて改む。

二三、今既懺悔⁽¹⁾已。與善知識⁽²⁾、受無相三歸依戒⁽³⁾。大師言、善知識⁽⁴⁾、歸依覺⁽⁵⁾、
兩足尊⁽⁶⁾、歸依正離欲⁽⁷⁾、歸依淨衆中尊⁽⁸⁾。從今已後、稱佛爲師、更不歸依余⁽⁹⁾、
邪迷外道⁽¹⁰⁾。願自三寶慈悲証明⁽¹¹⁾。善知識⁽¹²⁾、惠能勸善知識⁽¹³⁾、歸依(自)三寶⁽¹⁴⁾。佛⁽¹⁵⁾
者覺也。法者正也。僧者淨也。自心歸依覺⁽¹⁶⁾、邪迷不生⁽¹⁷⁾、少欲知足⁽¹⁸⁾、離財離色、
名兩足尊⁽¹⁹⁾。自心歸(依)正⁽²⁰⁾、念念無邪故⁽²¹⁾、即無愛著⁽²²⁾。以無愛著、名離欲尊。
自心歸(依)淨⁽²³⁾、一切塵勞妄念⁽²⁴⁾、雖在自性⁽²⁵⁾、自性不染著⁽²⁶⁾、名衆中尊。凡夫⁽²⁷⁾
(不)解⁽²⁸⁾、從日至日⁽²⁹⁾、受三歸依戒⁽³⁰⁾。若言歸佛⁽³¹⁾、佛在何處⁽³²⁾。若不見佛⁽³³⁾、即無所⁽³⁴⁾
歸⁽³⁵⁾。既無所歸⁽³⁶⁾、言却是妄⁽³⁷⁾。善知識⁽³⁸⁾、各自觀察⁽³⁹⁾、莫錯用意⁽⁴⁰⁾。經中只即言自歸依⁽⁴¹⁾
佛⁽⁴²⁾、不言歸(依)他佛⁽⁴³⁾。自性不歸⁽⁴⁴⁾、(依)無所處⁽⁴⁵⁾。

校記

- (1) : (D) 本は脱す。
- (2) : (底) 本は「智」、(D)、(P) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (6) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (8) : (D) (P) 本は無し。
- (9) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (10) : (底) 本は「燈名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (11) : (底) 本は「善」の上に「善」の字あり、(D)、(P) 本により削除。
- (12) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (13) : (底) 本は無し、(D) 本は「身」、(衣) 補校(四〇)を参照。
- (14) : (P) 本は脱す。
- (15) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (16) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (17) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (18) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (19) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (20) : (底) 本は無し、(興) 本にて補う。(P) 本は「解」の下に「脱」の字有り。
- (21) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (22) : (D) (P) 本は無し。
- (23) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (24) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。

(25) : (底) 本は無し、(P) 本にて補う。

二四、今既自歸依⁽¹⁾三寶、惣各各至心。與善知識、說摩訶般若波羅蜜法⁽²⁾。善知識、雖念不解。惠能與說、各各聽。摩訶般若波羅蜜者、西國梵語、唐言大智惠彼岸到。此法須行、不在口⁽³⁾(念)。口念不行、如⁽⁴⁾(幻)如化。修行者法身與佛等也。何名摩訶。摩訶者是大。心量廣大、猶如虛空。莫定心坐⁽⁵⁾、即落無⁽⁶⁾記空⁽⁷⁾。能含日月星辰、大地山河⁽⁸⁾、一切草木、惡人善人、惡法善法、天堂地獄、盡在空中。世人性空、亦復如是。

校記

- (1) : (底) 本は「衣」、(D)、(P) 本にて改む。
- (2) : (P) 本は無し。
- (3) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (4) : (底) 本は無し、(興) 本にて補う。
- (5) : (D) (P) 本は「由」。
- (6) : (底) 本は「座」、(Y) 本にて改む。(D) (P) 本は「禪」。
- (7) : (底) 本は「既」、(D)、(P) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「何」、(D) 本にて改む。

二五、性含萬法是大、萬法盡是自性⁽¹⁾。見一切人及非人、惡之與善、惡法善法、盡皆不捨、不可染著⁽²⁾、猶如虛空、名之爲大。此是摩訶行。迷人口念、智者心⁽³⁾(行)。又有迷人、空心不思、名之爲大、此亦不是。心量大、不行是小⁽⁴⁾。莫口空說。不修此行、非我弟子⁽⁵⁾。

校記

- (1) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (2) : (P) 本は無し。
- (3) : (底) 本は「知」、(D) 本にて改む。

(4) : (底) 本は「由」、(Y) 本にて改む。(P) 本は「如」の字無し。

(5) : (底) 本は無し、(真) 本にて補う。

(6) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。

(7) : (底) 本は「少」、(D)、(P) 本にて改む。

二六、何名般若。般若⁽¹⁾是智慧。一(切)時中、念念不愚⁽²⁾、常行智慧、即名般若行。一念愚⁽³⁾即般若絶、一念智即般若生。⁽⁴⁾(世人愚迷、不見般若。口説般若)心中常愚、⁽⁵⁾(自言)我修般若。⁽⁶⁾(般若)無形相、智慧性即是。何名波羅蜜。此是西國梵音、⁽⁷⁾(唐)言彼岸到。解義離生滅、著境生滅起。⁽⁸⁾如水有波浪、即是於此岸。離境無生滅、如水永長流。故即名到彼岸、故名波羅蜜。迷人口念、智者心行。當念時有妄、有妄即非真有。⁽⁹⁾念念若行、是名真有。⁽¹⁰⁾悟此法者、悟般若法、修般若行。不修即凡、一念修行、法身等佛。善知識、即煩惱是菩提、⁽¹¹⁾前念迷即凡、後念悟即佛。善知識、摩訶般若波羅蜜、最尊最上第一、無住無去無來。三世諸佛從⁽¹²⁾中出。將大智慧⁽¹³⁾到彼岸、打破五陰煩惱塵勞。最尊最上第一、⁽¹⁴⁾讚最上大乘法修行、定成佛。無去無住無來往、是定惠等、不染一切法。⁽¹⁵⁾三世諸佛、從中變⁽¹⁶⁾三毒、爲戒定惠。⁽¹⁷⁾

校記

(1) : (底) 本は無し、(真) 本にて補う。

(2) : (D) (P) 本は「思」。

(3) : (D) (P) 本は「思」。

(4) : (底) 本は無し。「真」本にて補う。

(5) : (底) 本は無し、(真) 本にて補う。

(6) : (底) 本は無し、(真) 本にて補う。

(7) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。

(8) : (底) 本は「竟」、(P) 本にて改む。

(9) : (底) 本は「去」、(D)、(P) 本にて改む。

(10) : (底) 本は「被」、(D)、(P) 本にて改む。

- (11) : (D) (P) 本は「行」の上に「不」の字有り、衍字。
- (12) : (底) 本は「提」の下に「捉」の字あり、(D)、(P) 本により削除。
- (13) : (P) 本は「最尊」の二字無し。
- (14) : (D) (P) 本は「口」。
- (15) : (底) 本は「知」、(D)、(P) 本にて改む。
- (16) : (底) 本は「讚最上最上乘法」とするが、「讚最上大乘法」とする(P) 本に従う。
- (17) : (P) 本は「變」の字無し。

二七、善知識、我此法門、從⁽¹⁾（一般若生）八萬四千智惠。何以故。爲世⁽²⁾（人）有八萬四千塵勞。若無塵勞、般若常在、不離自性⁽³⁾。悟此法者、即是無⁽⁴⁾念無憶無著。⁽⁵⁾莫起誑妄、即自是眞如性用智惠觀照、於一切法、不取不捨、即⁽⁸⁾見性成佛道。

校記

- (1) : 底本は無し、(眞) 本にて補う。
- (2) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (3) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「億」、(D)、(P) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「去」、(D)、(P) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「知」、(D)、(P) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。

二八、善知識、若欲入甚深法界、入般若三昧者、直修般若波羅蜜行。但持⁽¹⁾金剛般若波羅蜜經一卷、即得見性入般若三昧。當知此人功德無量。經中分明⁽³⁾讚嘆⁽⁴⁾、不能具說。此是最上乘法、爲大智上根人說。小根智人、若聞法、心不⁽⁵⁾

生信。何以故。譬如大龍、若下大雨、雨於閻浮提、如漂草葉。若下大雨、雨⁽⁷⁾於大海、不增不減。若大乘者、聞說金剛經、心開悟解。故知本性自有般若之⁽⁸⁾智、自用智惠觀照、不假文字。譬如其雨水、不從天有、元是龍王於江海中、將身引此水、令一切衆生、一切草木、一切有情無情、悉皆蒙⁽¹⁰⁾豪潤。諸水衆流、却入大海、海納衆水、合爲一體。衆生本性般若之智、亦復如是。

校記

- (1) : (P) 本は「法」の上に「心」の字有り。
- (2) : (D) 本は「直修」を「直須修」とする。(P) 本は「直修」を「眞須修」とする。
- (3) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (4) : (P) 本は「歎」。
- (5) : (底) 本は「少」、(真) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「衣」、(真) 本にて改む。(D) 本は「提」、(P) 本は無し。
- (7) : (底) 本は「放」、(Y) 本にて改む。(潘) 本に「放」は「於」の誤だという。
- (8) : (D) (P) 本は「般若之智」を「本性之智」とする。
- (9) : (底) 本は「知」、(D)、(P) 本にて改む。
- (10) : (底) 本は「無」、(D)、(P) 本にて改む。
- (11) : (底) 本は「像」、(D)、(P) 本にて改む。

二九、小根⁽¹⁾之人、聞說此頓教、猶如大地草木根性自小者。若被大雨一沃、悉皆自倒、不能增長⁽³⁾。小根之人、亦復如是。有般若之智、與大智之人、亦無差別。因何聞法即不悟。緣邪見障重、煩惱根深。猶如大雲蓋覆於日、不得風吹、日無能現。般若之智、亦無大小。爲一切衆生、自有迷心、外修覓佛、未悟自性。即是小根人、聞其頓教、不信外修。但於自心、令自本性常起正見、煩惱塵勞衆生、當時盡悟。猶如大海納於衆流、小水大水合爲一體。即是見性。

内外不住、來去自由。能除執心、通達無礙。心修此行、即興般若波羅蜜經、本無差別。

校記

- (1) : (底) 本は「少」、(真) 本にて改む。
 (2) : (底) 本は「少」、(真) 本にて改む。
 (3) : (底) 本は「到」、(D) 本にて改む。(D) 本は「悉」を「迷」に作る。(P) 本は「悉」を「速」とする。
 (4) : (底) 本は「少」、(真) 本にて改む。
 (5) : (底) 本は「智」の下に「之」の字あり、(D) 本に従い削除。(P) 本は「若」の字無し。
 (6) : (P) 本は無し。
 (7) : (底) 本は「來」、(D)、(P) 本にて改む。
 (8) : (D) (P) 本は「正見」の下に「一切邪見」の四字有り。
 (9) : (P) 本は「以」。

三〇、一切經書及文字、小大二乘、十二部經、皆因⁽¹⁾(人)置。因智慧性故、⁽²⁾故能建立。我若無、智人、一切萬法、本亦不有。⁽³⁾故知萬法本從人興、一切經書、因人說有。緣在人中、有愚有智、愚爲小故、智爲大人。⁽⁴⁾迷人問於智者、⁽⁵⁾智人與愚人說法、令使愚者悟解心開。迷人若悟心開、與大智人無別。故知不悟、⁽⁶⁾即佛是衆生。一念若悟、即衆生是佛。⁽⁷⁾故知一切萬法、盡在自身心中。⁽⁸⁾何不從自心、頓見眞如本性。菩薩戒經云、我本源自性清淨。⁽⁹⁾識心見性、自成佛道。⁽¹⁰⁾即時豁然、還得本心。⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾

校記

- (1) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
 (2) : (底) 本は「故」の下に「然」あり。
 (3) : (底) 本は「無」、(D)、(P) 本にて改む。

- (4) : (底) 本は「有」の下に「有」の字あり、(D)、(P) 本に従い削除。
- (5) : (底) 本は「少」、(D)、(P) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「問迷人」、(Y) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「深」、(D)、(P) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「即」の下に「是」の字あり、(D)、(P) 本に従い削除。
- (9) : (底) 本は「生」の下に「不」の字あり、(D)、(P) 本に従い削除。
- (10) : (P) 本は無し。
- (11) : (底) 本は「現」、(D)、(P) 本にて改む。
- (12) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (13) : (底) 本は「願」、(D)、(P) 本にて改む。
- (14) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。

三一、善知識、我於忍和尚處、⁽¹⁾一聞言下大悟、⁽²⁾頓見眞如本性。是故以教法、⁽³⁾⁽⁴⁾流行後代、⁽⁵⁾令學道者頓悟菩提。各自觀心、令自本性頓悟。若⁽⁷⁾(不)能自悟者、⁽⁸⁾須覓大善知識⁽⁹⁾示道見性。何名大善知⁽¹⁰⁾(識)。解最上乘法、⁽¹¹⁾直示正路、⁽¹²⁾是大善知識。是大因緣、⁽¹³⁾所謂化導⁽¹⁴⁾令得見佛。一切善法、皆因大善知識能發起。故三世⁽¹⁵⁾諸佛十二部經、云在人性中、本自具有。不能自性悟、⁽¹⁶⁾須得善知識⁽¹⁷⁾示道見性。若自悟者、不假外善知識。若取外求善知識、⁽¹⁸⁾望得解脫、無有是處。識自心內⁽¹⁹⁾善知識、即得解⁽²⁰⁾(脫)。若自心邪迷、妄念顛倒、外善知識即有教授、汝若不得⁽²¹⁾自悟、當起般若觀照。剎那間妄念俱滅。即是自眞正善知識、一悟即至佛地。⁽²²⁾自性心地、以智惠觀照、內外明徹、識自本心。若識本心、即是解脫。既得解脫、即是般若三昧。悟般若三昧、即是無念。何名無念。無念法者、見一切法、⁽²³⁾不著一切法、遍一切處、不著一切處。常淨自性、使六賊從六門走出、於六塵中、不離不染、來去自由。即是般若三昧、自在解脫、名無念行。莫百物不思。⁽²⁴⁾當令念絕、即是法縛、⁽²⁵⁾即名邊見。悟無念法者、萬法盡通。悟無念法者、見諸

⁽²⁶⁾
佛境界。悟無念頓法者、至佛位地。

校記

- (1) : (P) 本は「聞一」。
- (2) : (底) 本は「伍」、(D)、(P) 本にて改む。
- (3) : (D)、(P) 本は「頓」。
- (4) : (底) 本は「汝」、(D)、(P) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「今」、(興) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「伍」、(D)、(P) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は無し、(興) 本にて補う。
- (8) : (底) 本は「亦」、(D)、(P) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は「姓」、(D)、(P) 本にて改む。
- (10) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (11) : (P) 本は「乗」の上に「大」の字有り。
- (12) : (底) 本は「是」、(D)、(P) 本にて改む。
- (13) : (底) 本は「為」、(興) 本にて改む。
- (14) : (底) 本は「道」、(興) 本にて改む。
- (15) : (D)、(P) 本は無し。
- (16) : (底) 本は「姓」、(Y) 本にて改む。(D)、(P) 本は無し。
- (17) : (D) (P) 本は「外」の下に「求」の字有り。
- (18) : (底) 本は「説」、(D)、(P) 本にて改む。
- (19) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (20) : (底) 本は「知」、(D)、(P) 本にて改む。
- (21) : (底) 本は「也」、(D)、(P) 本にて改む。
- (22) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (23) : (D) (P) 本は「不著一切法」の句無し。
- (24) : (P) 本は無し。
- (25) : (底) 本は「傳」、(D)、(P) 本にて改む。

(26) : (P) 本は無し。

三二、善知識、後代得⁽¹⁾吾法者、常見⁽²⁾吾法身不離汝左右。善知識、將此頓教法門、同見同行、發願受持。如是佛教、終身受持、而不退者、欲入聖位。然須⁽³⁾傳受時、從上已來、默然而付⁽⁴⁾衣法。發大誓願、不退菩提、即須分付⁽⁵⁾。若不⁽⁶⁾同見解、無有志願、在在處處、勿妄宣傳。損彼前人、究竟無益。若愚人⁽⁷⁾不解、⁽⁸⁾謾此法門、百劫⁽⁹⁾萬劫⁽¹⁰⁾千生、斷佛種性。

校記

(1) : (底) 本は「悟」、(D)、(P) 本にて改む。(D)、(P) 本は「吾」の下の「法」の字無し。

(2) : (底) 本は「故」、(D)、(P) 本にて改む。

(3) : (底) 本は「縛」、(D)、(P) 本にて改む。

(4) : (D)、(P) 本は無し。

(5) : (底) 本は「於」、(D)、(P) 本にて改む。

(6) : (P) 本は無し。

(7) : (底) 本は「」、(D)、(P) 本にて改む。

(8) : (底) 本は「遇」、(D)、(P) 本にて改む。

(9) : (D) 本は「謗」、(P) 本は「傍」。

(10) : (D)、(P) 本は「萬劫」の二字無し。

三三、大師言、善知識、聽⁽¹⁾吾說無相頌⁽²⁾。令汝迷者罪滅⁽³⁾、亦名滅罪頌。頌曰、

愚人修福不修道、謂言修福而是⁽⁴⁾ (道)⁽⁵⁾。

布施供養福無邊、心中三業元來在。

若將修福欲滅罪、後世得福罪元在⁽⁶⁾。

若解向心除罪緣、各自性中真懺悔⁽⁷⁾。

若悟大乘真懺悔、除邪行正即無罪⁽⁸⁾。

學道之人能自觀、即與悟人同一例。

大師令傳此頓教、願學之人同一體。⁽¹¹⁾

若欲當來覓本身、三毒惡緣心中洗。⁽¹²⁾

努力修道莫悠悠、忽然虛度一世休。

若遇大乘頓教法、虔誠合掌志心求。

大師說法了、韋使君官寮僧衆道俗、讚言無盡、昔所未聞。

校記

(1) : (底) 本は「悟」、(D)、(P) 本にて改む。

(2) : (底) 本は「訟」、(D)、(P) 本にて改む。

(3) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。

(4) : (D) (P) 本は「如」、河西方言で「如」と「而」は同音で通用す。〈衣〉補校58参照〉

(5) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。

(6) : (底) 本は「无造」、(P) 本にて改む。(D) 本は「元造」。

(7) : (底) 本は「世」、(D)、(P) 本にて改む。

(8) : (底) 本は「海」、(D) 本にて改む。

(9) : (底) 本は「海」、(D)、(P) 本にて改む。

(10) : (底) 本は「造」、(D)、(P) 本にて改む。

(11) : (D)、(P) 本は「今」。

(12) : (D)、(P) 本は「裏」。

三四、使君禮拜白言、和尚說法、實不思議。弟子當有少疑、欲問和尚。⁽¹⁾望意和尚、大慈大悲爲弟子說。大師言、有疑即問、何須再三。⁽³⁾使君問、法可⁽⁴⁾不是西國第一祖達磨祖師宗旨。⁽⁵⁾大師言、是。弟子見說、達磨大師化梁武帝、問⁽⁶⁾達磨、朕一生已來、造寺布施供養、有功德否。⁽⁷⁾達磨答言、並無功德。武帝惆悵、遂遣達磨出境。⁽⁸⁾未審此言、請和尚說。六祖言、實無功德。使君勿疑達大師言。⁽⁹⁾武帝著邪道、不識正法。使君問、何以無功德。和尚言、造寺布施供養、⁽¹⁰⁾

只是修福。不可將福以爲功德。⁽¹²⁾（功德）在法身、非在於福田。⁽¹³⁾自法性有功德
⁽¹⁴⁾（見性是德）。平直是德、佛性外行恭敬。若輕一切人、吾我不斷、即自無功德。⁽¹⁵⁾
⁽¹⁶⁾自性虛妄、法身無功德。⁽¹⁷⁾念念德行、平等直心、德即不輕、常行於敬。自修身
⁽¹⁸⁾即功、自修心即德。⁽¹⁹⁾功德自心作、福與功德別。武帝不識正理、非祖大師有過。
⁽²⁰⁾

校記

- (1) : (底) 本は「自」、(P) 本にて改む。
- (2) : (底) 本は「聞」、(D) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「議」、(K) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「聞」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「聞」、(D) (P) 本も「聞」。
- (6) : (底) 本は「不」の字が重複するが、(D) 本により削除。
- (7) : (D) (P) 本は「師」。「祖」の下「達磨」は (D) (P) 本には「達摩」とする。以下・で示す。
- (8) : (底) 本は「諦」、(D)、(P) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は「未」、(D)、(P) 本にて改む。
- (10) : (底) 本は「有」の字が重複するが、(D)、(P) 本により削除。
- (11) : (底) 本は「君」の下に「朕」の字あり、(D)、(P) 本により削除。
- (12) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (13) : (D)、(P) 本は「田」の字無し。
- (14) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。
- (15) : (底) 本は眞、(D) (P) 本にて改む。
- (16) : (底) 本は「悟」、(D)、(P) 本にて補う。
- (17) : (D) (P) 本は「自性無功德」。
- (18) : (D)、(Y) 本は無し。
- (19) : (底) 本は「眞」、(Y) 本にて改む。
- (20) : (底) 本は「修」の下に「身」の字あり、(D)、(P) 本により削

除。

三五、使君禮拜又問、弟子見僧俗、常念阿彌陀佛、願往生西方。請和尚說、
 得生彼否、望爲破疑。大師言、使君聽、惠能與說。世尊在舍衛國、說西方引
 化。經文分明、去此不遠。只爲下根說近。說遠只緣上智。人自兩種、法無兩
 般。迷悟有殊、見有遲疾。迷人念佛生彼、悟者自淨其心。所以佛言、隨其心
 淨、則佛土淨。使君、東方但淨心無罪、西方心不淨有愆。迷人願生東方西方、
 所在處並皆一種。心但無不淨、西方去此不遠。心起不淨之心、念佛往生難到。
 除(十)惡即行十萬、無八邪即過八千。但行直心、到如彈指。使君、但行十
 善、何須更願往生。不斷十惡之心、何佛即來迎請。若悟無生頓法、見西方只
 在刹那。不悟頓教大乘、念佛往生路遙、如何得達。六祖言、惠能與使君、移
 西方利那間、目前便見。使君願見否。使君禮拜、若此得見、何須往生。願和
 尚慈悲、爲現西方、大善。大師言、唐見西方、無疑即散。大衆愕然、莫知何
 事。大師曰、大衆、大衆作意聽。世人自色身是城、眼耳鼻舌身即是城門。外
 有五門、內有意門。心即是地、性即是王。性在王在、性去王無。性在身心存、
 性去身(心)壞。佛是自性作、莫向身(外)求。自性迷佛即(是)衆生、自
 性悟衆生即是佛。慈悲即是觀音、喜捨名爲勢至、能淨是釋迦、平直是彌勒。
 人我是須彌、邪心是大海、煩惱是波浪、毒心是惡龍、塵勞是魚鼈、虛妄即是
 神鬼、三毒即是地獄、愚癡即是畜生。十善是天堂。無我人、須彌自倒、除邪
 心、海水竭、煩惱無、波浪滅、毒害除、魚龍絕。自心地上覺性如來、施大智
 惠光明、照曜六門清淨、照破六欲諸天、下照三毒若除、地獄一時消滅、內外
 明徹、不異西方。不作此修、如何到彼。座下聞說、讚聲徹天、應是迷人、了
 然便見。使君禮拜、讚言善哉善哉、普願法界衆生、聞者一時悟解。

校記

(1) : (底) 本は「僧」の下に「道」の字あり、(D) (P) 本に従い削除。

(2) : (底) 本は「大」、(D)、(P) 本にて改む。

- (3) : (D) (P) 本は無し。
- (4) : (底) 本は「徳」、(D) 本にて改む。
- (5) : (D)、(P) 本は「城」。
- (6) : (底) 本は「重」、(D)、(P) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「不」、(D)、(P) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「名」、(D)、(P) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は「者」、(Y) 本にて改む。
- (10) : (D)、(P) 本は「心」の下に「地」の字有り。
- (11) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。
- (12) : (底) 本は「眞」、(眞) 本にて改む。
- (13) : (底) 本は「禪」、(眞) 本にて改む。
- (14) : (D) (P) 本は「遠」。
- (15) : (底) 本は「問」、(D)、(P) 本にて改む。
- (16) : (底) 本は「日」、(D)、(P) 本にて改む。
- (17) : (D)、(P) 本は「唐」を「一時」とする。
- (18) : (底) 本は「是」、(D)、(P) 本にて改む。
- (19) : (底) 本は「六」、(眞) 本にて改む。
- (20) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。
- (21) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。
- (22) : (底) 本は無し、(D)、(P) 本にて補う。
- (23) : (底) 本は「眞」、(D)、(P) 本にて改む。(D)、(P) 本は「直」の下に「即」の字有り。
- (24) : (D)、(P) 本は「我」の下に「即」の字有り。
- (25) : (D)、(P) 本は「心」の下に「即」の字有り。(D)、(P) 本は「大海」を「海水」とする。
- (26) : (D) 本は「悩」の下に「即」の字有り。(P) 本は「是」の字無し。
- (27) : (D)、(P) 本は「心」の下に「即」の字有り。

- (28) : (D)、(P) 本は「勞」の下に「即」の字有り。
 (29) : (P) 本はここまで、尾題「南宗頓教最上乘壇經一卷」有り。
 (30) : (D) 本は「善」の下に「即」の字有り。
 (31) : (底) 本は「我無人」、(D) 本にて改む。
 (32) : (底) 本は「波」、(D) 本にて改む。
 (33) : (底) 本は「問」、(D) 本にて改む。
 (34) : (底) 本は「人」、(D) 本にて改む。

三六、大師言、善知識、若欲修行、在家亦得、不由在寺。在寺不修、如西方心惡之人。在家若修行、如東方人修善。但願自家修清淨、即是西方。⁽¹⁾使君問和⁽²⁾、在家如何修、願爲指授。大師言、善知識、⁽³⁾惠能與道俗作無相頌。尽誦取、依此修行、常與惠能說一處無別。頌曰、

說通及心通、如日至虛空。⁽⁵⁾

惟傳頓教法、出世破邪宗。

教即無頓漸、迷悟有遲疾。

若學⁽⁶⁾頓教法、愚人不可迷。

說即須萬般、合離還歸一。⁽⁷⁾⁽⁸⁾

煩惱暗宅中、常須生惠日。

邪來因煩惱、正來煩惱除。

邪正悉不用、清淨至無餘。⁽⁹⁾

菩提本清淨、起心即是妄。

淨性於妄中、但正除三障。

世間若修道、一切盡不妨。

常現在已過、與道即相當。

色類自有道、離道別覺道。

覺道不見道、到頭還自懊。

若欲貪⁽¹⁰⁾覺道、行正即是道。

自若無正心、暗行不見道。

若眞修道人、不見世間愚。
 若見世間非、自非却是左。
 他非我不罪、我非自有罪。⁽¹¹⁾
 但自去非心、打破煩惱碎。
 若欲化愚人、是須有方便。⁽¹²⁾
 勿令破彼疑、即是菩提見。
 法元在世間、於世出世間。
 勿離世間上、外求出世間。
 邪見在世間、正見出世間。⁽¹³⁾
 邪正悉打却、⁽¹⁴⁾菩提性宛然。
 此但是頓教、亦名爲大乘。
 迷來經累劫、悟則刹那間。⁽¹⁵⁾

校記

- (1) : (底) 本は「惡」、(D) 本にて改む。
- (2) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (3) : (底) 本は「智」、(D) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「衣」、(D) 本にて改む。
- (5) : (D) 本は「處」。
- (6) : (D) 本は「頓法門」。
- (7) : (D) 本は「雖」。
- (8) : (D) 本は「理」。
- (9) : (底) 本は「疾」、(D) 本にて改む。
- (10) : (D) 本は「覺眞道」。
- (11) : (底) 本は「有」、(D) 本にて改む。
- (12) : (D) 本は「事」。
- (13) : (底) 本は「出」、(D) 本にて改む。
- (14) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。

(15) : (D) 本は「即。」

三七、大師言、善知識、汝等盡誦取此偈。依⁽¹⁾（此）⁽²⁾偈修行、去惠能千里、常在能邊。⁽³⁾（依）此不修、對面千里⁽⁴⁾（遠）。各各自修、法不相待。⁽⁵⁾衆人且散、⁽⁶⁾惠能歸漕溪山。衆生若有大疑、來彼山間。⁽⁷⁾爲汝破疑、同見佛性。⁽⁸⁾合座官僚道⁽⁹⁾俗、禮拜和尚、無不嗟嘆。善哉大悟、昔所未聞。⁽¹⁰⁾嶺南有福、生佛在此、誰能⁽¹¹⁾得知。一時盡散。

校記

(1) : (底) 本は「智」、(D) 本にて改む。

(2) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。

(3) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。

(4) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。(D) 本は「千里」の上に「底」の字有り。

(5) : (底) 本は「持」、(D) 本にて改む。

(6) : (底) 本は「旦」、(D) 本にて改む。

(7) : (底) 本は「間」、(D) 本にて改む。

(8) : (底) 本は「世」、(D) 本にて改む。

(9) : (底) 本は「奪」、(D) 本にて改む。

(10) : (底) 本は「問」、(D) 本にて改む。

(11) : (底) 本は「智」、(D) 本にて改む。

三八、大師往漕溪山、韶廣二州行化、四十餘年。若論門人、僧之與俗、約⁽¹⁾有三五千人、說不盡。若論宗旨、傳授壇經、以此爲依約。⁽²⁾若不得壇經、即無⁽³⁾稟受。須知去處年月日姓名、遞相付囑。⁽⁴⁾無壇經稟承、非南宗弟子也。未得稟⁽⁵⁾承者、雖說頓教法、未知根本、終不免諍。⁽⁶⁾但得法者、只勸修行。⁽⁷⁾諍是勝負之⁽⁸⁾心、與道違背。⁽⁹⁾

校記

- (1) : (底) 本は約有なし、(D) 本にて補う。
- (2) : (D) 本は「不」の下に「可」の字有り。
- (3) : (底) 本は「指」、(D) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「衣」、(Y) 本にて改む。(D) 本は無し。
- (5) : (底) 本は「法」、(眞) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「性」、(D) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「遍」、(眞) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「定」、(D) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は「修」、(眞) 本にて改む。
- (10) : (D) 本は「道」の上に「佛」の字有り。

三九、世人盡傳南宗能北秀、未知根本事由。且秀禪師於荆南府堂陽縣玉泉寺住持修行、惠能大師於韶州城東、三十五里漕溪山住。法即一宗、人有南北。因此便立南北。何以漸頓。法即一種、見有遲疾。見遲即漸、見疾即頓。法無漸頓、人有利鈍。故名漸頓。

校記

- (1) : (底) 本は「比」、(眞) 本にて改む。
- (2) : (底) 本は「南荊苻」、(眞) 本にて改む。
- (3) : (D) 本は「堂楊懸」、(眞) 本は「當陽縣」とする。
- (4) : (底) 本は「時」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「比」、(D) 本にて改む。
- (6) : (D) 本は「頓漸」とする。

四〇、神秀師常見人說惠能法疾直指路。秀師遂喚門人僧志誠曰、汝聰明多智、汝與吾至漕溪山。到惠能所、禮拜但聽、莫言吾使汝來。所聽得意旨記取、却來與吾說。看惠能見解與吾誰疾遲。汝第一早來、勿令吾佐。志誠奉使、歡

喜⁽⁶⁾遂行、半月中間、即至漕溪山、見惠能和尚⁽⁷⁾、禮拜即聽、不言來處。志誠⁽⁸⁾聞法、言下便悟、即契本心、起立即禮拜。白⁽⁹⁾言和尚、弟子從玉泉寺來。秀師處⁽¹⁰⁾不得契悟、聞和尚說、便契本心。和尚慈悲、願當⁽¹¹⁾教示。惠能大師曰、汝從彼⁽¹²⁾來、應是細作。志誠曰、⁽¹³⁾（不是。六祖曰、何以不是。志誠曰、）未說時即是、⁽¹⁴⁾說了即⁽¹⁵⁾（不）是。六祖言、煩惱即是菩提、亦復如是。

校記

- (1) : (底) 本は「旨」、(Y) 本にて改む。(D) 本には「指」の下に「見」の字有り。
- (2) : (底) 本は「換」、(D) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「徳」、(D) 本に改む
- (4) : (底) 本は「弟」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「」、(眞) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は無し。(D) 本にて補う。
- (7) : (底) 本は「當」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「城」、(D) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は「自」、(D) 本にて改む。
- (10) : (底) 本は「徳」、(D) 本にて改む。
- (11) : (底) 本は「散」、(D) 本にて改む。
- (12) : (底) 本は「被」、(D) 本にて改む。
- (13) : (底) 本は「不是六祖曰何以不是志誠曰」の12字なし。(D) 本にて補う。
- (14) : (底) 本は「說」の下に「乃」の字あり、(D) 本に従い削除。
- (15) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。

四一、大師謂志誠曰、吾聞、⁽¹⁾汝禪師教人、唯傳戒定惠。⁽²⁾汝和尚教人戒定惠如何。當爲吾說。志誠曰、秀和尚言戒定惠、諸惡不作名爲戒、諸善奉行名爲惠、自淨其意名爲定。此即名爲戒定惠。彼作如是說。不知和尚所見如何。惠

能和尚答曰、此説不可思議。惠能所見又別。志誠⁽⁴⁾問、何以別。惠能答曰、見有遲疾。志誠⁽⁵⁾請和尚說所見戒定惠。大師言、汝⁽⁶⁾聽吾説、看⁽⁷⁾吾所見處。心地無非⁽⁸⁾是自性⁽⁹⁾戒、心地無亂⁽¹⁰⁾是自性⁽¹¹⁾定、心地無癡⁽¹²⁾是⁽¹³⁾自性⁽¹⁴⁾惠。能大師言、汝⁽¹⁵⁾（師）戒定惠、勸小根智人、吾戒定惠、勸上⁽¹⁶⁾（智）⁽¹⁷⁾人。得悟自⁽¹⁸⁾（性）、亦不立戒定惠。志誠⁽²⁰⁾言、請大師説、不立如何。大師言、自性⁽²¹⁾無非無亂無癡、念念般若觀照、常離法相、有何可立。自性頓修、無有漸次、所以不立。志誠禮拜、便不離漕溪山。即爲門人、不離大師左右。

校記

- (1) : (底) 本は「與」、(D) 本にて改む。
 (2) : (底) 本は「與」、(D) 本にて改む。
 (3) : (底) 本は「城」、(D) 本にて改む。
 (4) : (底) 本は「城」、(D) 本にて改む。
 (5) : (底) 本は「城」、(D) 本にて改む。
 (6) : (底) 本は「汝」の上に「如」の字あり、(Y) 本に従い削除。
 (7) : (底) 本は「悟」、(D) 本にて改む。
 (8) : (底) 本は「悟」、(D) 本にて改む。
 (9) : (底) 本は「無」の下に「疑」の字あり、(眞) 本に従い削除。
 (10) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
 (11) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
 (12) : (底) 本は「自姓是惠」、(D) 本に「是自性惠」とするのに従って改む。
 (13) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
 (14) : (D) 本は無し。
 (15) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
 (16) : (底) 本は「諸」、(D) 本にて改む。
 (17) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
 (18) : (底) 本は「吾」、(D) 本にて改む。

- (19) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。
 (20) : (底) 本は「城」、(D) 本にて改む。
 (21) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
 (22) : (底) 本は「當」、(眞) 本にて改む。
 (23) : (底) 本は「姓」、(D) 本にて改む。
 (24) : (底) 本は「立」、(衣) (潘) 本にて改む。
 (25) : (底) 本は「此」、(D) 本にて改む。
 (26) : (底) 本は「契」、(D) 本にて改む。

四二、又有一僧、名法達。⁽¹⁾常誦法華經七年、心迷不知正法之處。⁽²⁾(來至曹溪山、禮拜、問大師言、弟子常誦妙法華經七年、心迷不知正法之處)、經上有疑。大師智惠廣大、願爲除疑。⁽³⁾大師言、法達、法即甚達、汝心不達。經上無⁽⁴⁾疑、汝心自邪、而求正法。吾心正定、即是持經。吾一生已來、不識文字。汝將法華經來、對吾讀一遍。⁽⁵⁾⁽⁶⁾吾聞即知。法達取經到、對大師讀一遍。六祖聞已、即識佛意、便与法達、說法華經。⁽⁸⁾六祖言、法達、法華經無多言、七卷盡是譬喻因緣。如來廣說三乘、只爲世人根鈍。經文分明、無有餘乘、⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾唯一佛乘。大師⁽¹²⁾(言)、法達、汝聽一佛乘、莫求二佛乘、迷却汝性。⁽¹³⁾經中何處是一佛乘、⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾(吾)與汝說。經云、諸佛世尊、唯以一大事因緣故、出現於世。已上十六字是正法。⁽¹⁷⁾(此)法如何解。此法如何修。汝聽吾說。人心不思、本源空寂、離却邪見、即一大事因緣。⁽¹⁸⁾內外不迷、即離兩邊。⁽¹⁹⁾外迷著相、內迷著空。於相離相、於空離空、即是⁽²⁰⁾不迷。⁽²¹⁾⁽²²⁾(若)悟此法、一念心開、出現於世。心開何物。開佛知見。佛猶如覺也。分爲四門。開覺知見、示覺知見、悟覺知見、入覺知見。開示悟入、從一處入。即覺知見、見自本性、即得出世。大師言、法達、吾常願一切世人、心地常自開佛知見、莫開衆生知見。世人心⁽²⁵⁾(邪)、愚迷造惡、自開衆生知見。世人心正、起智惠觀照、自開佛知見。莫開衆生知見、開佛知見、即出世。大師言、法達、此是法華經一乘法。⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾向下分三、爲迷人故。汝但依一佛乘。大師言、法達、心行轉法華、不行法華轉。⁽²⁹⁾⁽³⁰⁾⁽³¹⁾心正轉法華、心邪法華轉。⁽³²⁾開佛知見轉法華、開衆生知見⁽³³⁾⁽³⁴⁾被法華轉。大師言、努力依法修行、即是轉經。

法達一聞、言下大悟、涕淚悲泣、白言和尚、實未曾轉法華、七年被法華轉。⁽³⁵⁾
 已後轉法華、念念修行佛行。大師言、即佛行是佛。其時聽人無不悟者。⁽³⁶⁾
⁽³⁷⁾

校記

- (1) : (D) 本は「妙法蓮華經」。
- (2) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (3) : (底) 本は「時」、(D) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「癡」、(眞) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「問」、(D) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「之」、(D) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「問」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「汝」、(Y) 本にて改む。(D) 本は「已」。
- (9) : (底) 本は「内」、(D) 本にて改む。
- (10) : (底) 本は「聞公」、(D) 本にて改む。
- (11) : (D) 本は「唯」の下に「有」の字有り。
- (12) : (底) 本は無し、(Y) 本にて補う。
- (13) : (底) 本は「聖」、(眞) 本にて改む。
- (14) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。(底) 本は「與汝」を「汝與」とする。(D) 本にて改む。
- (15) : (底) 本は「汝」、(D) 本にて改む。
- (16) : (底) 本は「家」、(D) 本にて改む。
- (17) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。
- (18) : (底) 本は「是」、(D) 本にて改む。
- (19) : (底) 本は「看」、(D) 本にて改む。
- (20) : (底) 本は「不」の下に「空」の字あり、(D) 本に従い削除。
- (21) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (22) : (底) 本は「吾」、(眞) 本にて改む。
- (23) : (底) 本は「上」、(眞) 本にて改む。

- (24) : (底) 本は「悟」、(D) 本にて改む。
 (25) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。
 (26) : (底) 本は「智」、(D) 本にて改む。
 (27) : (底) 本は「智」、(D) 本にて改む。
 (28) : (底) 本は「智」、(D) 本にて改む。
 (29) : (底) 本は「達」、(眞) 本にて改む。
 (30) : (底) 本は「名」、(D) 本にて改む。
 (31) : (底) 本は「於」、(D) 本にて改む。
 (32) : (底) 本は「耶」、(D) 本にて改む。
 (33) : (底) 本は「智」、(D) 本にて改む。
 (34) : (底) 本は「智」、(D) 本にて改む。
 (35) : (底) 本は「自」、(D) 本にて改む。
 (36) : (底) 本は「僧」、(D) 本にて改む。
 (37) : (底) 本は「入」、(D) 本にて改む。

四三、時有一僧、名智常。來漕溪山、禮拜和尚、問⁽¹⁾四乘法義。智常問和尚⁽²⁾
 曰、佛說三乘、又言最上乘。弟子不解、望爲教示。惠能大師曰、汝自身心見、
 莫著外法相、元無四乘法。人心量四等、法有四乘。見聞讀誦是小乘、悟⁽³⁾(法)
 解義是中乘、依法修行是大乘。萬法盡通、萬行俱備、一切無離、但離法相、
 作無所得⁽⁴⁾、是最上乘。乘是行義、不在口諍。汝須自修、莫問吾也。⁽⁵⁾
⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

校記

- (1) : (底) 本は「聞」、(D) 本にて改む。
 (2) : (底) 本は「聞」、(D) 本にて改む。
 (3) : (底) 本は「敬」、(D) 本にて改む。
 (4) : (底) 本は「心」の下に「不」の字あり、(D) 本に従い削除。
 (5) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。
 (6) : (底) 本は「衣」、(D) 本にて改む。

- (7) : (底) 本は「幸」、(D) 本にて改む。
 (8) : (底) 本は「徳」、(D) 本にて改む。
 (9) : (底) 本は「是」の下に「最上」の二字あり、(興) 本に従い削除。
 (10) : (底) 本は「悟」、(D) 本にて改む。

四四、又有一僧、名神會、南陽人也。至漕溪山、禮拜問言、和尚坐禪、見亦不見。大師起把打神會三下、却問神會、吾打汝、痛不痛。神會答言、亦痛亦不痛。六祖言曰、吾亦見亦不見。神會又問大師、何以亦見亦不見。大師言、吾亦見、常見自過患、故云亦見。亦不見者、不見天地人過罪。所以亦見亦不⁽²⁾(見)也。汝亦痛亦不痛如何。神會答曰、若不痛、即同無情木石、若痛即同凡、即起於恨。大師言神會、向前見不見是兩邊、痛(不痛)⁽³⁾是生滅。汝自性且不見、敢來弄人。⁽⁴⁾(神會)禮拜、禮拜更不言。大師言、汝心迷不見、問善知識覓路、汝心悟自見、依法修行。汝自迷不見自心、却來問惠能見否。吾不自知、代汝迷不得。汝若自見、代得吾迷。何不自修、問吾見否。神會作禮、便爲門人、不離漕溪山中、常在左右。

校記

- (1) : (底) 本は「座」、(D) 本にて改む。
 (2) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
 (3) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
 (4) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
 (5) : (底) 本は「名」、(D) 本にて改む。

四五、大師遂喚門人法海、志誠、法達、智常、志通、志徹、志道、法珍、法如、神會。大師言、汝等拾弟子近前。汝等不同餘人。吾滅度後、汝各爲一⁽²⁾方頭。吾教汝說法、不失本宗。舉⁽³⁾(三)科法門、動⁽⁴⁾(用)三十六對、出沒即離兩邊。說一切法、莫離於性相。若有人問法、出語盡雙、皆取法對。來去相因、究竟二法盡除、更無去處。三科法門者蔭界入。蔭是五蔭、界⁽⁵⁾(是)十八

界、⁽⁶⁾是十二入。何名五蔭。色蔭、受蔭、⁽⁷⁾想蔭、行蔭、識蔭是。何名十八界。六塵、六門、六識。何名十二入。外六塵、中六門。何名六塵。色聲香味触⁽⁸⁾法是。何名六門。眼耳鼻舌身意是。法性起六識、眼識耳識鼻識舌識身識意識、六門六塵。自性含萬法、名爲含藏識。思量即轉識、生六識、出六門見六塵、⁽⁹⁾是三十六。由自性邪起、十八邪含、自性⁽¹⁰⁾(正起)、十八正含。惡用即衆生、⁽¹¹⁾善用即佛。⁽¹²⁾用由何等。由自性對。

校記

- (1) : (D) 本は「智」。
 (2) : (D) 本は「師」。
 (3) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
 (4) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
 (5) : (底) 本は無し、(K) 本にて補う。
 (6) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
 (7) : (底) 本は「相」、(D) 本にて改む。
 (8) : (底) 本は「未獨」、(D) 本にて改む。
 (9) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。
 (10) : (底) 本は無し、(鈴) 本にて補う。
 (11) : (底) 本は「油」、(D) 本にて改む。
 (12) : (底) 本は「油」、(D) 本にて改む。

四六、外境無情對有五。天與地對、日與月對、暗與明對、陰與陽對、水與火對。⁽¹⁾語言法相對有十二對。有爲無爲⁽²⁾(對)、有色無色對、有相無相對、有漏無漏對、色與空對、動與靜對、清與濁對、凡與聖對、僧與俗對、老與少對、⁽³⁾大大與小小對、⁽⁴⁾長與短對、⁽⁵⁾高與下對。自性起用對、有十九對。邪與正對、癡與惠對、愚與智對、⁽⁶⁾亂與定對、⁽⁷⁾戒與非對、直與曲對、實與虛對、峻與平對、煩惱與菩提對、慈與害對、喜與嗔對、捨與慳對、進與退對、生與滅對、常與無常對、法身與色身對、化身與報身對、體與用對、性與相⁽⁸⁾(對)、⁽⁹⁾有情無情對、⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾

言語與法相⁽¹²⁾有十二對、外境無⁽¹³⁾(情)有五對、(自性起用有十九對)⁽¹⁴⁾、都合成三十六對法也。此三十六對法⁽¹⁵⁾解用、通一切經、出入即離兩邊。如何自性起用。三十六對、共人言語、出外於⁽¹⁶⁾(相)離相、入內於空離空。著空惟長無明、著相惟⁽¹⁷⁾(長)邪見。謗法直言不用文字。既云不用文字、人不合言語。言語即是⁽¹⁸⁾文字。自性上說空、正語言、本性不空、迷自惑、語言除故。暗不自暗、以明⁽¹⁹⁾故暗。暗不自暗、以明變暗。以暗現明、來去相因。三十六對亦復如是。

校記

- (1) : (底) 本は「語與言對法與相對」、(眞) 本にて改む。
- (2) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (3) : (底) 本は「淨」、(眞) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「性」、(D) 本にて改む。(D) 本は「亂與聖」。
- (5) : (底) 本は「少少」、(D) 本は「大大與小小對」の句無し。
- (6) : (底) 本は「性」の下に「居」の字あり、(眞) 本に従い削除。
- (7) : (底) 本は「典」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「空」、(D) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (10) : (底) 本は「清」、(D) 本にて改む。
- (11) : (底) 本は「親」、(Y) 本にて改む。
- (12) : (D) 本は「相」の下に「對」の字有り。
- (13) : (底) 本は「外境有無」、(柳)、(石) 本参照。
- (14) : (底) 本は「三身有三對」(鈴)、(柳)、(石) 本を参照して改める。
- (15) : (D) 本は「能」。
- (16) : (底) 本は無し、(興) 本にて補う。
- (17) : (底) 本は「名」、(D) 本にて改む。
- (18) : (底) 本は無し、(興) 本にて補う。
- (19) : (底) 本は「名」、(D) 本にて改む。
- (20) : (底) 本は「名」、(D) 本にて改む。

四七、大師言、十弟子、已後傳法、⁽¹⁾遞相教授一卷⁽²⁾壇經、不⁽³⁾稟受⁽⁴⁾壇經、非我宗旨。如今得⁽⁵⁾了、⁽⁶⁾遞代流行。得⁽⁷⁾遇壇經者、如見吾親授。拾僧得教授已、寫爲壇經、⁽⁷⁾遞代流行、得者必當見性。

校記

(1) : (底) 本は「迎」、(D) 本にて改む。

(2) : (底) 本は「檀」、(D) 本にて改む。

(3) : (底) 本は「授」、(D) 本にて改む。

(4) : (底) 本は「檀」、(D) 本にて改む。

(5) : (底) 本は「迎」、(D) 本にて改む。

(6) : (底) 本は「檀」、(D) 本にて改む。

(7) : (底) 本は「迎」、(D) 本にて改む。

四八、大師先天二年八月三日滅度。七月八日喚門人告別。大師⁽¹⁾（先）天元年於新州國恩寺造塔、至先天二年七月告別。大師言、汝衆近前。⁽²⁾吾至八月欲離世間。汝等有疑早問、爲汝破疑、當令迷者盡、使汝安樂。吾若去後、無人教汝。法海等衆僧聞已、涕淚悲泣。唯有神會、不動亦不悲泣。六祖言、神會小僧却得、善等毀譽不動。余者不得、數年山中、更修何道。汝今悲泣、更有阿誰、憂吾不知去處在。若不知去處、終不別汝。汝等悲泣、即不知吾⁽⁹⁾（去）處。若知去處、即不悲泣。性⁽¹⁰⁾體無生無滅、無去無來。汝等盡坐。吾與汝一偈、眞假動靜偈。汝等盡誦取。見此偈意、⁽¹¹⁾與⁽¹²⁾吾同。依此修行、不失宗旨。僧衆禮拜、請大師留偈、⁽¹⁷⁾敬心受持。偈曰、

一切無有眞、不以見於眞。

若見於眞者、⁽¹⁸⁾是見盡非眞。

若能自有眞、離假即心眞。

自心不離假、無眞何處眞。

有⁽¹⁹⁾情即解動、無⁽²⁰⁾情即不動。

若修不動行、同無情不動。
 若見眞不動、動上有不動。
 不動是不動、無情無佛種。⁽²¹⁾
 能善分別相、第一義不動。
 若悟作此見、則是眞如用。
 報諸學道者、努力須用意。
 莫於大乘門、却執生死智。
 前頭人相應、即共論佛語。⁽²²⁾
 若實不相應、合掌令勸善。
 此教本無諍、⁽²³⁾若諍失道意。⁽²⁴⁾
 執迷諍法門、⁽²⁵⁾自性入生死。

校記

- (1) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (2) : (底) 本は「權」、(眞) 本にて改む。(D) 本は「鄴」。
- (3) : (底) 本は「五」、(D) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「外」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「與」、(D) 本にて改む。
- (6) ; (底) 本は「入」、(D) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「與」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「除」、(D) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (10) : (底) 本は「聽」、(眞) 本にて改む。(D) 本は「性無生滅」。
- (11) : (底) 本は「座」、(D) 本にて改む。
- (12) : (底) 本は「如」、(D) 本にて改む。
- (13) : (底) 本は「淨」、(眞) 本にて改む。
- (14) : (底) 本は「與」、(D) 本にて改む。
- (15) : (底) 本は「汝」、(D) 本にて改む。

- (16) : (底) 本は「於」、(D) 本にて改む。
 (17) : (底) 本は「特」、(D) 本にて改む。
 (18) : (底) 本は「衣」、(D) 本にて改む。
 (19) : (底) 本は「性」、(眞) 本にて改む。
 (20) : (底) 本は「性」、(D) 本にて改む。
 (21) : (底) 本は「衆」、(D) 本にて改む。
 (22) : (D) 本は「義」。
 (23) : (底) 本は「無」、(D) 本にて改む。

四九、衆僧既聞、識大師意、更不敢諍、依法修行、一時禮拜、即知大師不
 永住世。⁽²⁾上座法海向前言大師、大師去後、衣法當付何人。大師言、法即付了、
 汝不須問。吾滅後二十餘年、邪法遼亂、惑我宗旨。有人出來、不惜身命、定⁽³⁾
 佛教是非、堅立宗旨、即是吾正法。衣不合⁽⁴⁾伝。汝不信、吾與誦先代五祖傳衣
 付法頌。⁽⁵⁾若據第一祖達摩頌意、即不合傳衣。聽吾與汝頌。⁽⁷⁾頌曰、

⁽¹⁾第一祖達摩和尚頌曰、

⁽⁸⁾吾本來唐國、⁽⁹⁾傳教救迷情。⁽¹⁰⁾

一花開五葉、結菓自然成。

⁽¹¹⁾第二祖惠可和尚頌曰、

本來緣有地、從地種花生。

當本元無地、花從何處生。⁽¹¹⁾

⁽¹²⁾第三祖僧璨和尚頌曰、

花種雖因地、地上種花生。⁽¹³⁾

花種無生性、於地亦無生。⁽¹⁴⁾

⁽¹⁵⁾第四祖道信和尚頌曰、

花種有生性、因地種花生。

先緣不和合、一切盡無生。

⁽¹⁶⁾第五祖弘忍和尚頌曰、

有情來下種、無情花即生。

無情又無種、心地亦無生。

(.)
第六祖惠能和尚頌曰、

心地含情種、法雨即花生。⁽¹⁸⁾⁽¹⁶⁾

自悟花情種、菩提果自成。⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾

校記

- (1) : (底) 本は「之」、(D) 本にて改む。
- (2) : (D) 本は「久」。
- (3) : (底) 本は「弟」、(D) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「轉」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「誦」、(K) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「弟」、(D) 本にて改む。以下・で示す。
- (7) : (底) 本は「五」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「大」、(眞) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は「穢」、(D) 本にて改む。
- (10) : (底) 本は「名清」、(D) 本にて改む。
- (11) : (底) 本は「願」、(D) 本にて改む。
- (12) : (底) 本は「璚」、(D) 本にて改む。
- (13) : (D) 本は「須」。
- (14) : (底) 本は「化」、(D) 本にて改む。
- (15) : (D) 本は「性」。
- (16) : (D) 本は「化」。
- (17) : (底) 本は「吾」、(D) 本にて改む。
- (18) : (D) 本は「性」。
- (19) : (底) 本は「菓」、(P) 本にて改む。

五〇。能大師言、汝等聽吾作二頌、取達摩和尚頌意。⁽¹⁾汝迷人依此頌修行、必當見性。

⁽²⁾
第一頌曰、

心地邪花放、五葉逐根隨。

共造無明業、見被業風吹。

二頌曰、

心地正花放、五葉逐根隨。

共修般若惠、當來佛菩提。

六祖說偈已了、放衆生散。門人出外思惟、即知大師不久住世。

校記

(1) : (D) 本は「磨」。

(2) : (底) 本は「弟」、(D) 本にて改む。以下は・で示す。

(3) : (底) 本は「葉」、(Y) 本にて改む。

(4) : (底) 本は「葉」、(D) 本にて改む。

(5) : (底) 本は「恨」、(D) 本にて改む。

五一。六祖後至八月三日、食後大師言、汝等著位坐、吾今共汝等別。法海
 問言、此頓教法傳授、從上已來至今幾代。六祖言、初傳授七佛、釋迦牟尼佛
 第七、大迦葉第八、阿難第九、末田地第十、商那和修第十一、優婆塞多第十
 二、提多迦第十三、佛陀難提第十四、佛陀蜜多第十五、脇比丘第十六、富那
 奢第十七、馬鳴第十八、毘羅長者第十九、龍樹第二十、迦那提婆第二十一、
 羅睺羅第二十二、僧迦那提第二十三、僧迦耶舍第二十四、鳩摩羅第二十五、
 闍耶多第二十六、婆修盤多第二十七、摩拏羅第二十八、鶴勒那第二十九、師
 子比丘第三十、舍那婆斯第三十一、優婆塞第三十二、僧迦羅第三十三、須婆
 蜜多第三十四、南天竺國王子第三子菩提達摩第三十五、唐國僧惠可第三十六、
 僧璨第三十七、道信第三十八、弘忍第三十九、惠能自身當今受法第四十四。
 大師言、今日已後遞相傳授、須有依約、莫失宗旨。

校記

- (1) : (底) 本は「善」、(眞) 本にて改む。(D) 本は「若」。
- (2) : (底) 本は「座」、(D) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「五」、(D) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「與」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「聞」、(D) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「受」、(興) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「受」、(Y) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「未因」、(眞) 本にて改む。
- (9) : (D) 本は「鞠」。
- (10) : (D) 本は「者」の旁にまた「老」の字有り。
- (11) : (底) 本は「那」、(興) 本によって改める。
- (12) : (底) 本は「竹」、(D) 本にて改む。
- (13) : (D) 本は「三」の下に「太」の字有り。
- (14) : (底) 本は「十四」、(D) 本にて改む。
- (15) : (底) 本は「 」、(D) 本にて改む。
- (16) : (底) 本は「受」、(眞) 本にて改む。

五二。法海又白、大師今去、留付何法、令後代人、如何見佛。⁽¹⁾六祖言、汝聽、後代迷人、但識衆生、即能見佛。若不識衆生、覓佛萬劫、不得見也。⁽²⁾吾今教汝識衆生見佛、更留見眞佛解脫頌。⁽³⁾迷即不見佛、悟者即見。法海願聞、代代流傳、世世不絶。六祖言、汝聽、吾与汝說。⁽⁴⁾後代世人、若欲覓佛、但識⁽⁵⁾仏心衆生即能識、佛即縁有衆⁽⁶⁾(生)、離衆生無佛心。

迷即佛衆生、悟即衆生佛。

愚癡佛衆生、智惠衆生佛。

心⁽⁷⁾嶮佛衆生、平等衆生佛。

一生心若嶮、佛在衆生中。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

一念⁽¹⁰⁾悟若平、即衆生自佛。

我心自有佛、自佛是眞佛。

自若無佛心、向何處求佛。

校記

- (1) : (底) 本は「今」、(D) 本にて改む。
- (2) : (D) 本は「得見」を「可得」とする。
- (3) : (底) 本は「五」、(D) 本にて改む。
- (4) : (底) 本は「汝與」、(D) 本にて改む。
- (5) : (D) 本は「佛心」の二字なし。
- (6) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (7) : (底) 本は「劔」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「劔」、(D) 本にて改む。
- (9) : (D) 本は「心」。
- (10) : (底) 本は「吾」、(D) 本にて改む。

五三。大師言、汝等門人好住。吾留一頌、名自性眞佛解脫頌。後代迷⁽¹¹⁾、
⁽²⁾聞此頌意、⁽³⁾即見自心自性眞佛。與汝此頌、吾共汝別。頌曰、

眞如淨性是眞佛、邪見三毒是眞魔。⁽⁴⁾
 邪見之人⁽⁵⁾魔在舍、正見之人⁽⁶⁾佛則過。
 性中邪見⁽⁷⁾三毒生、即是魔王⁽⁸⁾來住舍。
 正見忽除⁽⁹⁾三毒心、魔變成佛⁽¹⁰⁾眞無假。⁽¹¹⁾
 化身報身⁽¹²⁾及法身、三身元本是一身。
 若向身中覓自見、即是⁽¹³⁾佛菩提因。
 本從化身⁽¹⁴⁾生淨性、淨性常在⁽¹⁵⁾化身中。
 性使化身⁽¹⁶⁾行正道、當來⁽¹⁷⁾圓滿眞無窮。
 姪性本身⁽¹⁸⁾清淨因、除姪即無淨性身。
 性中但自離⁽¹⁹⁾五欲、見性刹那⁽²⁰⁾即是眞。
 今生若悟⁽²¹⁾頓教門、悟即眼前⁽²²⁾見世尊。
 若欲修行⁽²³⁾云覓佛、不知何處⁽²⁴⁾欲求真。

若能身中自有眞、有眞即是成佛因。

自不求眞外覓佛、去覓總是大癡人。

頓教法者是西流、救度世人須自修。

今報世間學道者、不依此是大悠悠。

大師說偈已了。遂告門人曰、汝等好住。今共汝別。吾去已後、莫作世情悲泣、而受人弔問錢帛、著孝衣、即非聖法、非我弟子。如吾在日一種、一時端坐。但無動無靜、無生無滅、無去無來、無是無非、無住（無往）、坦然寂淨、即是大道。吾去已後、但依法修行、共吾在日一種。吾若在世、汝違教法、吾住無益。大師云此語已、夜至三更、奄然遷化。大師春秋七十有六。

校記

- (1) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。
- (2) : (底) 本は「門」、(柳) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「意」の下に「意」の字あり、(Y) 本に従い削除。
- (4) : (底) 本は「摩」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「摩」、(D) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「知」、(D) 本にて改む。
- (7) : (底) 本は「衆」、(D) 本にて改む。
- (8) : (底) 本は「摩」、(D) 本にて改む。
- (9) : (底) 本は「則」、(D) 本にて改む。
- (10) : (底) 本は「生」、(D) 本にて改む。
- (11) : (底) 本は「摩」、(D) 本にて改む。
- (12) : (底) 本は「淨」、(眞) 本にて改む。
- (13) : (底) 本は無し、(D) 本にて補う。
- (14) : (底) 本は「花」、(D) 本にて改む。
- (15) : (底) 本は「花」、(D) 本にて改む。
- (16) : (底) 本は「花」、(D) 本にて改む。
- (17) : (底) 本は「員」、(D) 本にて改む。

- (18) : (D) 本は「淨性因」。
- (19) : (底) 本は「吾」、(D) 本にて改む。
- (20) : (底) 本は「吾」、(D) 本にて改む。
- (21) : (底) 本は「性」、(D) 本にて改む。
- (22) : (D) 本は「求」。
- (23) : (D) 本は「覓」。
- (24) : (底) 本は「求」、(D) 本にて改む。
- (25) : (底) 本は「保」、(眞) 本にて改む。
- (26) : (底) 本は「於」、(Y) 本にて改む。
- (27) : (底) 本は「門」、(眞) 本にて改む。
- (28) : (底) 本は「淨」、(D) 本にて改む。
- (29) : (底) 本は無し、(眞) 本にて補う。
- (30) : (底) 本は「但」、(D) 本にて改む。
- (31) : (底) 本は「衣」、(D) 本にて改む。
- (32) : (底) 本は「花」、(D) 本にて改む。

五四。大師滅度之日、寺内異香氤氲、⁽¹⁾經數日不散。山崩地動、⁽²⁾林木變白、⁽³⁾日月無光、風雲失色。八月三日滅度。至十一月、迎和尚神座於漕溪山葬。在龍龕之内、白光出現、直上衝天、⁽³⁾二日始散。韶州刺史韋據立碑、至今供養。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

校記

- (1) : (底) 本は「諸」、(D) 本にて改む。
- (2) : (底) 本は「用」、(D) 本にて改む。
- (3) : (D) 本は「三」。
- (4) : (底) 本は「使」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「處」、(D) 本にて改む。

五五。此壇經法海上座集。上座無常、付同學道滌、道滌無常、付門人悟眞。

悟眞在嶺南⁽¹⁾漕溪山法興寺、見今傳授此法⁽²⁾。

校記

(1) : (底) 本は「溪漕」、(D) 本にて改む。

(2) : (底) 本は「受」、(鈴) 本にて改む。

五六。如付此法⁽¹⁾、須得上根智⁽²⁾、深信佛法⁽³⁾、立大悲⁽⁴⁾。持此經、以爲稟承⁽⁵⁾、於今不絶。

校記

(1) : (底) 本は「山」、(D) 本にて改む。

(2) : (底) 本は「須德上恨知」、(D) 本にて改む。

(3) : (底) 本は「心」、(D) 本にて改む。

(4) : (D) 本は「立」の下に「於」の字有り。

(5) : (底) 本は「衣」、(D) 本にて改む。

五七。和尚本是韶州曲江⁽¹⁾縣人也。如來入涅槃⁽²⁾、法教流東土。共傳無住、即我心無住。此眞菩薩說、眞實示行喻⁽³⁾、唯教大智人⁽⁴⁾、示旨於凡度⁽⁵⁾。誓修修行行、遭難不退、遇苦能忍、福德深厚、方授此法。如根性不堪⁽⁶⁾、材量不得、須求此法⁽⁷⁾、違立不德者⁽⁸⁾、不得妄付壇經。告諸同道者、令知密意。

⁽⁹⁾南宗頓教最上大乘壇經法一卷。⁽¹⁰⁾

大乘志三十、大聖志⁽¹¹⁾四十、大通志五十、大寶志六十、大法志七十、大德志八十。⁽¹²⁾清之藏志三十、清持藏志四十、清寶藏志五十、清蓮藏志六十、清海藏志七十、大法藏志八十。⁽¹³⁾

此是法號。

校記

- (1) : (底) 本は「懸」、(鈴) 本にて改む。
- (2) : (底) 本は「盤」、(D) 本にて改む。
- (3) : (底) 本は「眞示行実喻」。(D) 本に改む
- (4) : (底) 本は「是」、(D) 本にて改む。
- (5) : (底) 本は「衣」、(D) 本にて改む。
- (6) : (底) 本は「林」、(Y) 本にて改む。
- (7) : (D) 本は「得」。
- (8) : (底) 本は「令諸蜜意」、(D) 本は「令智蜜意」。
- (9) : ここから (P) 本有り。
- (10) : (D) (P) 本には無し。
- (11) : (D) (P) 本は「卅」。
- (12) : (D) (P) 本は無し。以下・で示す。
- (13) : (D) (P) 本は「四」。